送別歌行の形成と展開Ⅳ

乾　源　俊

帰老故郷……四一
冥然如夢……五〇
勅放帰山……五八
気酣登吹臺……六三
脱身事幽討……六九
採珠勿驚龍……七六
探元入窅黙……八三
夢遊天姥吟……一〇〇
入海随煙霧……一一六

開元二十九年から天宝元年にかけて、玄元皇帝廟と崇玄学設置、道挙施行、玄宗の老子夢見など、重要な施策と霊応があり、隠逸挙人「高道（不仕）」科の下詔があって李白は入京、翰林供奉となる。天宝三載から四載にかけて次の隠逸挙人「高蹈不仕」科があり、さなかに玄宗が空中に寿ぎの声を聞くというさらなる霊応がある。このとき李白はすでに離京して、梁宋の地にあった。

両隠逸挙人に応じたと思われるひとへの作としては、前者「高道（不仕）」科に元丹丘への「西岳雲臺歌送丹丘子」、後者「高蹈不仕」科には事前に蔡山人への「送蔡山人」詩と、事後に岑徵君への「鳴皐歌送岑徵君」「送岑徵君帰鳴皐山」詩がある。このうち蔡山人には高適による同時の作がある。これら在京時と離京後の作に、李白の身上、及び世相がどのように反映されるか。ここでは離京後の作を中心に、長安辞去から梁宋東魯の遊行における送別歌詩の展開、及び江東へと旅立つ際の「夢遊天姥吟留別」について考察する。

帰老故郷　李白は天宝三載春に宮廷を辞去した。その年の初めには賀知章を送別する宴が玄宗によって催されている。玄宗の送別詩に唱和した「送賀監帰四明応制」詩が文集に収められるが、偽作であることが疑われる。李白参加の有無は別として、この宴は玄宗朝において、帰隠するひとに対して、公的な餞送がどのように行われるのか見るのによい。加えて盧象の七言歌行の作も伝わっている。はじめにこれらと、李白が宮廷を辞去する際の留別詩とを見ておく。

関係事跡と詩作（一）入京前―在京時

入京以前

李白歌（随州？）

鳳笙篇

李白詩（東魯）

送韓準裴政孔巣父還山

開元二十九年

正月十五日　命両京諸路各置玄元皇帝廟詔

閏四月某日　玄宗　夢見一真容

五月一日　令写玄元皇帝真容分送諸道詔

天宝元年

正月七日　玄元皇帝降見　於丹鳳門通衢（永昌街空中）

二月九日　玄元皇帝廟成　於長安太寧坊

二月十一日　加玄元皇帝尊号　於含元殿

二月十五日　玄宗親祀（玉像開眼）　於玄元皇帝廟

○七月某日　下詔　有「高道（不仕）」挙徴

秋　李白入京

○十月二十六日～十一月二十八日　玄宗幸驪山温泉宮「高道（不仕）」挙親試

天宝二年

○正月元日　元会儀礼　於含元殿「高道（不仕）」挙人引見　処分

李白歌詩（長安）

白雲歌送劉十六帰山　＊西岳雲臺歌送丹丘子（安＝天宝二・郁＝天宝四）

送裴十八図南帰嵩山二首　送于十八応四子挙落第還嵩

天宝三載

正月　玄宗祖別賀知章於長楽坡

李白詩（長安）

送賀監帰四明応制　送賀賓客帰越

盧象歌（長安）

古歌辞送賀秘監帰会稽

春　李白勅放帰山

李白詩（長安）

還山留別金門知己（＝東武吟）

初出金門尋王侍御不遇詠壁上鸚鵡（一作勅放帰山留別陸侍御不遇詠鸚鵡）

○「高道（不仕）」挙関係事跡　＊「高道（不仕）」挙人？　ゴシック＝歌行

安旗・薛天緯『李白全集編年注釈』　郁賢皓『李白詩選』

賀知章送別の宴は、天宝三載正月五日、長楽坡にて催された。玄宗皇帝御製の詩に、左右宰相以下百官が唱和した。前年十二月二十日、道士となって故郷に帰りたいと辞表が奉られたのに、上は長年の功労を美して特段の配慮をなしたものである（「天宝……二年……十二月二十日、太子賓客賀知章請為道士還郷、捨会稽宅為千秋観」『唐会要』巻50雑記、「天宝二年、……十二月乙酉、太子賓客賀知章請度為道士還郷。……三載正月庚子、遣左右相已下祖別賀知章於長楽坡、上賦詩贈之」『旧唐書』巻9玄宗紀）。辞表が容れられるにあたって、賀知章は閣中に呼ばれ、諸王以下が拝辞。上は親しく詩序を制し、宴を設けて百僚に餞送させようとしたが、知章は辞退した。上は手詔もて、教育を受けた児子たちが親しく尊師に別れを告げる趣旨であり辞退するに及ばない、と答えたという（竇臮「述書賦」下自注「……特詔許之。重令入閣、諸王以下拝辞。上親制詩序、令所司供帳、百寮餞送、賜詩敘別。知章表謝。手詔答曰、……児子等常所執経故、令親別尊師之義、何以謝焉」『全唐文』巻447）。また、自宅を喜捨して千秋観としたい、住居周囲の湖数頃を放生池としたいとの願い出に、上は鏡湖剡川の一曲を下賜した（「又求周宮湖数頃為放生池、有詔賜鏡湖剡川一曲」『新唐書』巻196）。その他、恩賜は典設郎である長男の曾子を朝散大夫・本郡会稽司馬とし、知章に侍養せしめることなどに及んだ（竇臮「述書賦」下自注「仍拝其子典設郎子曾為朝散大夫本郡司馬、以伸侍養」『全唐文』巻447、『職官分紀』巻15・『玉海』巻29引『集賢注記』）。『旧唐書』（巻190中）賀知章伝にはこれらのことが簡潔にまとめられているが、併せて辞職のきっかけとなった出来事についても触れている。

天宝三載、知章因病恍惚、乃上疏請度為道士、求還郷里、仍捨本郷宅為観。上許之、仍拝其子典設郎曾為会稽郡司馬、仍令侍養。御制詩以贈行、皇太子已下咸就執別。

すなわち病気で「恍惚」状態となり、人事不省に陥ったのであると。この部分、『新唐書』（巻196）賀知章伝には「夢に帝居に游び、数日して寤」めたと記す。詳細はわからないものの、これは陶弘景が病を得て神秘体験をし、以降その宗教的探求を深化させたことを想起させる。賈嵩『華陽陶隠居内伝』（巻上、『道蔵』洞真部紀伝類翔）に言う。

忽一日、於石頭、恍然若有所適、無所覚知者。七日乃豁然自差云、覩見甚異。事秘不得知。

本起録云、年二十九、於石頭中、忽得病、不知人、不服薬、不飲食。経七日、乃豁然自差、説、多有所覩見。従此容色疲悴、言音亦跣宕闡緩者矣。

ある日突然のこと、石頭において、ぼうっとしてどこか行くところがあるかのようで、はっきりとした意識がないようであった。七日してからりと快癒し言うことには、とても奇異なものを見たと。ことは秘密で知ることができない。

『本起録』に曰わく「二十九才のとき、石頭において、突然病気になり、人事不省となり、薬も飲まず、食事も摂らなかった。七日経ち、そこでからりと快癒し、言うことには、いろいろなものを見たと。これより顔色は憔悴し、ことばは投げやりでゆっくりしたものとなった」。

挂冠に当たって公卿による盛大な餞送が行われたことと併せて、陶弘景の故事を踏襲するかのようだ（『華陽陶隠居内伝』巻上「先生既命舳東川、斉公卿並送征虜亭、挙酒振袂、皆云江東比来未有此事、乃今日見之、二疎聚金帰田園、亦何得称高」）。また、自宅を道観として提供しようというのは、玄宗が東都積善里の旧宅を玄元廟と崇玄学設立のために提供した、その顰みに倣ったものだろう。

玄宗の詩序と、長楽坡での送別詩は、玄宗御製「送賀秘監帰会稽」序、及び五言律詩一首、左右宰相以下による応制の五言律詩二十五首、及び五言排律六首が、宋の孔延之『会稽掇英総集』（巻2）に収められて遺る。『全唐詩』はうち玄宗と李林甫の五律を「送賀知章帰四明」（巻3）、「送賀知章帰四明応制」（巻121）という題で収めるのみ。『会稽掇英総集』には他に応制の七言律詩五首をも収めるが、後代の作者による模擬作、ないしは偽作と見なされる。李白の宋蜀刻本『李太白文集』（巻14）及び『全唐詩』（巻176）に採録する「送賀監帰四明応制」詩はこの七律五首と詩型及び韻字をおなじくし、かつ『会稽掇英総集』には採録しないことから、偽作の疑いが濃い。李白にはもう一首「送賀賓客帰越」と題する七言絶句が『李太白文集』（巻14）及び『文苑英華』（巻269）『会稽掇英総集』（巻2）『全唐詩』（巻176）に収められるが、こちらは「敦煌唐写本詩選残巻」に「陰盤駅送賀監帰越」と題して見えており、真作としてよい（陶敏「李白「送賀監帰四明応制」詩為偽作」『李白学刊』第二輯186―193頁）。この他『会稽掇英総集』には盧象の七言歌行一首、賀知章の回郷の作二首、朱放と李白による追憶の作、それぞれ一首と三首を収める。いま玄宗、李適之、李林甫の作を取り、盧象の歌行、及び陰盤駅での李白詩と併せて一瞥しておく。玄宗「送賀秘監帰会稽」序、及び詩は以下のとおり。

天宝三載、太子賓客賀知章、鑒於止足、抗帰老之疏。解組辞栄、志期入道。朕以其夙存微尚、年在遅暮、用修掛冠之事、俾遂赤松之遊。正月五日、将帰会稽、遂餞東路。乃命六卿庶尹、三事大夫、供帳青門、寵行邁也。豈惟崇徳尚歯、亦将励俗勧人。無令二疏、独光漢冊。乃賦詩贈行。凡預茲宴、宜皆属和。

天宝三載、太子賓客の賀知章は、止足の分に鑑みて、年老いて故郷に帰りたいとの上書をたてまつった。組みひもを解いて栄位を辞去し、志して道に入ることにしたいと。わたしは彼にはつとに高尚な心がけがあり、老齢に垂んとすることから、辞職の願いをおさめることによって、仙界に遊ぶ企てをとげさせようと思う。正月五日、会稽へ帰るにあたり、かくて東へ向かうのにはなむけする。そこで三公・六卿・諸長官に命じて、青門に宴の準備をし、道行きにめぐみをかけるのである。その徳と齢を尊んでのことであるのみならず、衆庶に奨励してのことでもある。ただ疏広と疏受が漢の歴史に輝くだけにはしない。そこで詩を賦し出立にあたって贈る。およそこの宴にあずかるものは、みな唱和するように。

遺栄期入道　辞老竟抽簪　　栄を遺てて道に入らんと期し　老を辞して竟に簪を抽く
豈不惜賢達　其如高尚心　　豈に賢達を惜しまざらんや　其れ高尚の心に如かんや
環中得秘要　方外散幽襟　　環中に秘要を得　方外に幽襟を散ず
独有青門餞　群公悵別深　　独り青門の餞有り　群公　悵別深し

栄名を捨てて道に入ることを期し、老もて辞職すべくとうとう冠の留め金をはずした。

すぐれた人物を惜しまないではない、しかし気高い心には及ばない。
宮仕えの身で秘訣を得て、世の外に静かな思いを解き放つ。
ただ青門での餞送があるばかり、みなの別れをうらむ気持はふかい。

玄宗の序は、典拠として引く「二疏」の故事を、『漢書』疏広伝の記述そのままになぞるようだ。疏広は止足を知り帰老すべく病もて辞職を願い出る。上は高齢をもって許し、公卿大夫以下が東の都門外に送別の宴を張る（「広謂受曰『吾聞、知足不辱、知止不殆、……帰老故郷、以寿命終、不亦善乎』。……即日父子俱移病。……広遂称篤、上疏乞骸骨。上以其年篤老、皆許之。……公卿大夫故人邑子設祖道、供張東都門外」巻71）。疏広と疏受は父子で皇太子の大傅と少傅の任にあったことから、いま太子賓客の賀知章が父子で帰老するのをたとえるのにちょうどかなった典故の素材となっている。詩は、栄位をすて道を志して辞職する相手、賢臣をおしみつつその心がけには代えがたいとするわが思い、道の志向をめぐる相手の来し方、行く末と展開して、祖餞の情景へと収められる。餞送の地「長楽坡」は都の東、北寄りの通化門から七里、滻水に臨む場所。漢の時代、坡の北から長楽宮を望むことができたという（「坡在通化門東七里、臨滻水。自坡之北可望漢長楽宮、故名長楽坡」徐松『唐両京城坊考』巻4西宮「龍首渠」注）。序と詩に「青門」と称するのは、漢の城東、覇城門が青色に塗られ、門外の灞橋が別れの場所であったことから喩えたもの（「長安城東出南頭第一門曰覇城門、民見門色青、名曰青城門、或曰青門」『三輔黄図』都城十二門、「灞橋在長安東、跨水作橋。漢人送客至此橋、折柳贈別」同、橋）。玄宗御詩に唱和した左右宰相の詩は以下のとおり。

同前　李適之

聖代全高尚　玄風闡道微　聖代　高尚全く　玄風　道微を闡く
筵開百寮餞　詔許二疏帰　筵開かれて百寮餞し　詔許されて二疏帰る
仙記題金籙　朝章換羽衣　仙記　金籙に題し　朝章　羽衣に換う
悄然承睿藻　行路満光輝　悄然として睿藻を承くれば　行路　光輝満つ

かしこき君の御代は気高さにみち、ほのかなおしえはかすかな道を明らかにする。
宴がはじまると百僚がはなむけし、詔が下り許されて疏広と疏受は帰る。
仙人としての記録が神仙の帳簿に書きつけられ、朝廷の礼服がはごろもに着換えられる。
しずかに天子の文章をうけたまわると、行く手にはひかりがみちあふれている。

同前　李林甫

挂冠知止足　豈独漢疏賢　挂冠　止足を知る　豈に独り漢疏の賢なるのみならんや
入道求真侶　辞恩訪列仙　道に入りて真侶を求め　恩を辞して列仙を訪ぬ
睿文含日月　宸翰動雲烟　睿文　日月を含み　宸翰　雲烟を動かす
鶴駕呉郷遠　遙遙南斗辺　鶴駕　呉郷遠し　遙遙　南斗の辺

止まると足るとを知って辞職するのは、ただ漢の二疏の賢者たちだけではない。
道に入り真人のともがらをもとめ、めぐみを辞退し仙人たちをたずねる。
天子の文章は日月の輝きをふくみ、自筆の御文書は雲やかすみを払うかのよう。
鶴に乗り呉の郷里へ帰る道のりは遠く、はるかかなた南斗星のあたり。

左相李適之の詩は、玄宗の御代を称えることにはじまり、いま送別の場で相手を神仙に見立てて、ここから向こうの世界へと旅立つさまを写し、御製の詩を受け輝かんばかりの行路を描く。右相李林甫の詩は、止足を知る二疏のような辞職から語り起こし、皇恩を辞去し入道を志す相手のさま、御製の序と詩のすばらしさを述べ、はるかな呉の地への帰路に思いをはせて締め括る。いずれも玄宗序が踏まえた漢の二疏の故事を承けたうえで、玄宗の治世あるいは文章を褒めたたえ、宴の場から行路の風景へと展望がひらけてゆく。玄宗が与えた知足帰老の物語、それをめぐる群臣の悲しみという枠組みに対し、応える宰臣の歌いぶりは、皇恩によりこの祖餞の場と相手の道行きが幸いに満ちていると、主上への言祝ぎに転じているかのようだ。

冥然如夢　『会稽掇英総集』（巻2）には五律・五排、及び七律による応制三十六首の後に続けて、盧象の「歌」幷びに「序」を載せている。正式の詩題名称は不明だが、序に「古歌辞一首」と称しており、さしあたり「古歌辞送賀秘監帰会稽」ないし「送賀秘監帰会稽歌」と呼んでおくのがよいか。『全唐文』に収める序文には

「送賀秘監帰会稽歌序」（巻307）と題する。『全唐詩続拾』には「紫陽真人歌」（巻14）と称している。内容は以下のとおり。

先生紫陽真人、□耳河目、神気有異。年八十六而道心益固、時人方之赤松子。去年寢疾累日、冥然如夢。長男曾子求於神鬼、長請於天、窃司命之籍、与鬼物相競而角觝焉。而告真人、乃泠然而帰。於是表請辞官、乞以父子入道、俱還故郷、仍以山陰旧宅為観焉。皇帝嘉尚其事、尋而見許、択日度公、与男田。時公卿大夫観者如堵、皆曰賢才也。正月五日、上令周公邵公洎百寮、餞別青門之内。玄鶴摩於紫霄、吹笙撃鼓、尽是仙楽、聞者莫不増歎、軽軒冕焉。余与真人相知、不以年、不以位。倶承太公之後、見賞王粲之詞。悠悠此別、不覚流涕。輒贈古歌辞一首。庶為真人伝用之耳。

先生紫陽真人は、□の耳と黄河の目をもち、すぐれたおもむきは異彩を放っている。御年八十六にして道をめざす心はますます堅固に、世の人は仙人赤松子にたとえている。去年病で何日も寝こみ、目を閉じて夢見るようであった。長男の曾子は鬼神に願い、久しく天に請うて、命を司る神の帳簿を覗き見たところ、鬼と競いあい勝ちを争っていると。そうして真人に告げたところ、すぐにすっきりと意識が戻った。そこで辞職の願いを奉り、父子で道に入り、ともに故郷に帰り、かさねて山陰の旧宅を道観に呈したいと乞うた。皇帝はそのことを褒め称え、ついで許され、日を選んで度牒をあたえ、男爵として田地をたまわった。そのとき公卿大夫の観衆は垣根のように取り囲み、みなすぐれた人材であると言った。正月五日、上は王侯貴族から百僚まで、青門のなかで送別させた。黒い鶴が天高く舞い、笙の音と鼓の声は、みな神仙の音楽のようであった。聞くものはみな賛嘆し、官位禄爵に価値はないとさえ思うくらい

になった。わたしが真人とあい知る仲となったのは、年齢や官位によるのではない。ともに太公望の後を継ぐような人物とみなされ、王粲のような詩を称賛されてのことである。はるかなるこの別れ、思わず涙が流れる。ただちに古歌辞一首を贈る。願わくは真人がこれを伝えて用いられんことを。

君不見先生耳鼻有仙骨　君見ずや　先生耳鼻に仙骨有り
自号狂生中有物　自ら狂生と号し　中に物有るを
金華侍講三十年　金華に侍講すること三十年
児戯公卿与簪笏　公卿と簪笏とを児戯とす
青門抗行謝客児　青門に行を謝客児に抗し
健筆連羇王献之　健筆は羇を王献之に連ぬ
長安素絹書欲徧　長安の素絹　書して徧ねからんと欲するも
主人愛惜常保持　主人愛惜して常に保持す
毎嘆二疏不足道　毎に嘆ず　二疏は道うに足りずと
複言四皓常枯槁　複た言う　四皓は常に枯槁せると
去年寝疾彌数旬　去年　疾に寝ぬること数旬に彌(わた)り
神鬼盈庭謀一老　神鬼　庭に盈ち　一老を謀る
長男泣血求司命　長男　血を泣し司命に求め

少女顰眉誦霊宝　少女　眉を顰めて霊宝を誦す
還如簡子複帰来　還た簡子の如く複(ふたた)び帰り来り
更与洪崖同寿考　更に洪崖と寿考を同じくす
上書北闕言授籙　書を北闕に上り授籙を言い
税駕東州願修道　駕を東州に税(と)きて修道を願う
初聞行路猶未信　初め行路を聞するも猶お未だ信ぜず
果達吾君謂之好　果して吾が君に達し之を好しと謂う
山陰旧宅作仙壇　山陰の旧宅に仙壇を作り
湖上間田種芝草　湖上の間田に芝草を種(う)う
鏡湖之水含杳冥　鏡湖の水は杳冥を含み
会稽仙洞多精霊　会稽の仙洞には精霊多し
須乗赤鯉游滄海　須らく赤鯉に乗り滄海に游ぶべく
当以群鵝写道経　当に群鵝を以て道経を写すべし
皇恩贈詩四十字　皇恩　詩を贈ること四十字
明主賜金三十鎰　明主　金を賜うこと三十鎰
供帳傾朝一送帰　供帳　朝を傾けて一たび帰るを送り
双童駟馬従茲出　双童駟馬　茲より出ず

回看紫綬若軽塵　回って紫綬を見ること軽塵の若し
遠別青門嗟故人　遠く青門に別れて故人を嗟かしむ
鴛鷺差池攀羽蓋　鴛鷺差池として羽蓋に攀じ
虹霓夭矯翊車輪　虹霓夭矯として車輪を翊（たす）く
田田列侍浮丘伯　田田として列侍するは浮丘伯
曾子栄過朱買臣　曾子　栄は朱買臣に過ぐ
余高若是有先覚　余は高しとす　是の若く先覚有りて
滅跡帰根従大樸　跡を滅し根に帰り大樸に従うを
千載悠悠等令威　千載悠悠として令威を等（ま）ち
十洲漫漫思方朔　十洲漫漫として方朔を思う
帰去来　帰り去かん
青牛頓足少遅回　青牛　頓足して少しく遅回す
忽然雲霧不相見　忽然として雲霧あり　相見ず
唯有飄飄香気来　唯だ飄飄として香気来る有り

ほら、先生は耳や鼻に仙人の資質があり、自分を狂人だと言い、身中には鬼物を宿している。金華殿で皇太子に講義すること三十年、高貴な身分や官位など取るに足りないとする。

送別の宴での作詩は謝霊運とはりあい、書の腕前ではおもがいを王献之につらねている。
長安中に白絹に書いた書がゆきわたろうとするが、主人は惜しんで常に手元においておく。
ことあるごとに二疏は言うに足りないとし、また四皓はいつもやせ衰えているという。
昨年病に伏せること数十日におよび、神や鬼が天の宮廷で老人について謀議していた。
長男は血の涙を流し司命の神に願い、年下の息女は眉をしかめて霊宝経をよみあげた。
やはり趙鞅が敗走し復位したように復活し、さらに仙人洪崖と長い寿命をともにした。
北の御門に上書して道籙を受けたいと請い、東の邦に馬を解き道を修めたいと願った。
当初行く先を申しあげたところ相手にされず、結局わが君のお耳に届いてよしと許された。
会稽山陰の旧い居宅に神仙を祀る壇を設け、湖のほとりにねかせた田地には霊芝を植える。
鏡湖の水はほの暗いものを含んでおり、会稽の仙人の洞窟には神霊が多く棲んでいる。
きっと赤い鯉に跨って青海原にあそび、かならず鵞の群と交換して道徳経を書くのだろう。
皇帝のめぐみにより五言律詩一首を贈呈され、明主は報奨として金三十鎰を下賜される。
餞送には朝廷の臣下がこぞって見送り、ふたりの召使いと四頭だての馬車で出発する。
振り返って紫の組紐を見ること塵芥のよう、青門に別れを告げて友人たちは悲嘆する。
鵷雛とさぎは前後して車の覆いにすがり、虹はまあるく橋を架けて車輪を持ちあげる。
鈴なりにならんではべるのは仙人の浮丘伯、曾子の栄誉はかの朱買臣をも越えている。
わたしは敬う、このように兆しをさとり、跡を絶って根本に帰り素朴さに就くのを。

千年もはるかに仙人の丁令威をまちもうけ、世界中ひろびろと方士の東方朔を思っている。
さあ帰ろう、青い牛は足踏みしてややぐずぐずしている。
急に雲と霧がでて見えなくなった、ただ風にのり香しい匂いがやってきただけ。

方外の士を題材とする七言歌行の書き方に従ったこの送別の作は、詠物の手法を採らず専ら人物描写に集中する。注目すべきは、事の経緯が詳細に記述されることだ。仙骨があり詩書の才をもつ賀知章のプロフィールに続いて、病気で昏倒すること数旬、その間「神鬼盈庭謀一老」神や鬼が天の宮廷で老人について謀議していたという。序には、病で何日も寝こみ「冥然如夢」目を閉じて夢見るようであった。長男が鬼神に祈り、司命の帳簿を窺ったところ「与鬼物相競而角觝焉」と。寿命が鬼と好い勝負だという意であろうか。いずれにしても神秘の体験が辞職のきっかけとして記される。『旧唐書』に言う「因病恍惚」の内容がここにはやや詳しく、はたして陶弘景の「覩見甚異。事秘不得知」に類する内容を思わせる。『新唐書』に言う「夢游帝居」は物語の大枠を捉えてのことであろう。これ以上のことは不明である。辞表の奉られた十二月二十日から長楽坡の宴の正月五日までの間、閣中で諸王の拝辞と玄宗の御詩を賜ったことは、竇臮「述書賦」自注より知られたが、道籙を受け男爵として田地を賜ったのは、別の機会が設けられたものであろうか。鏡湖のほのぐらい水と神霊の棲む会稽の山洞、そこに住まう相手の姿。また宴の場から旅立つさまを描いて作は締められる。

盧象は開元中に張九齢によって取り立てられた。李頎・王維・李白、ほか綦毋潛・祖詠らと詩の遣り取りがみとめられる（傅璇琮『唐才子伝校箋』第1冊237頁）。詩風は『河岳英霊集』には「雅にして素ならず」（巻下）と評

する。詩集十二巻が世に行われていたが、『全唐詩』（巻122）には二十数首を伝えるのみ。この作も『会稽掇英総集』に収録されて遺った。作中の具体的な描写から見て、長楽坡の宴には参加していたであろう。ただし玄宗の御詩に応酬した公的な作とは異なり、賀知章との個人的なよしみから別個に贈られたものか。ともあれ、この作の存在により、送別歌行が王維や李白だけでなく、当時の詩人にある程度のひろがりをもって行われていたことが察せられる。王維や李白の作が遺ったのは、特別な工夫を盛りこんでいたからだろう。とくに李白の場合は、自身の人生をそのなかに詠みこんでいくことにより、他者とは一線を画した特徴的なジャンルを形成している。

李白は陰盤駅で賀知章を見送った。陰盤駅は長楽駅から滋水駅を経て、昭応県の東十四五里、漢代の新豊故県、陰盤故城の地にあったという（「昭応東行十四五里至漢新豊故県陰盤故城、天宝初有陰盤駅」厳耕望『唐代交通図考』第1巻京都関内区篇2長安洛陽駅道25頁）。「送賀賓客帰越」詩（集巻14）に言う。

鏡湖流水漾清波　　鏡湖流水　清波漾（ただよ）い
狂客帰舟逸興多　　狂客の帰舟に逸興多し
山陰道士如相見　　山陰の道士　如し相見ば
応写黄庭換白鵝　　応に黄庭を写して白鵝に換うべし

鏡湖に水が流れ清い波となってただよう、狂人が帰る舟にはすぐれた興趣があふれている。
山陰の道士にもし会う機会があったら、黄帝経を書写して白い鵞鳥に換えてもらうがよい。

鏡湖の澄みきった、緩やかにうねる水の映像。そこへと舟をすすめる酔狂な友は、興に乗じて戴安道を訪うた王子猷の姿に重ねられていよう。後半には群鵝に換えて黄庭経を書いた王羲之の故事を用いる（「山陰有道士養群鵝、羲之意甚悦。道士云、為写黄帝経、当挙群相贈、乃為写訖、籠鵝而去」『太平御覧』巻238職官部三十六右将軍）。賀知章が草隷書の名手であったことを踏まえてのこと。盧象の歌行にも道徳経を書いたとして引かれていたが、それぞれにもとづくところがある（「山陰有一道士、養好鵝、羲之往観焉、意甚悦、固求市之。道士云、為写道徳経、当挙群相贈耳。羲之欣然写畢、籠鵝而帰、甚以為楽」『晋書』巻80王羲之伝）。賀知章は皇帝から鏡湖を下賜され、いま道の世界へと入ってゆく。四明狂客と号し、能筆として知られる。これらの要素をもとに、それぞれに作品造形がなされるが、この詩の特色は、鏡湖の清らかな水に流動性を加え、溢れる感興で満たしたところであろうか。のち自身も後を追うように江南地方をめざすことになるのだが、その際にも彼の地へのあこがれが述べられる。

勅放帰山　宮廷を辞去する際、翰林院の同僚に対して贈った留別の作は、ひとつが五言古詩による「還山留別金門知己」詩（集巻13）。『李太白文集』はおなじ詩を「東武吟」（巻5）という題で「楽府」の部にも収録する。その両方の題注に「出金門後書懐留別翰林諸公」という別の題名を記す。

好古笑流俗　素聞賢達風　古を好み流俗を笑い　素より賢達の風を聞く
方希佐明主　長揖辞成功　方に希う　明主を佐け　長揖して成功を辞するを

白日在青天　廻光矚微躬
恭承鳳凰詔　欲起雲蘿中
清切紫霄迴　優遊丹禁通
君王賜顔色　声価凌烟虹
乗輿擁翠蓋　扈従金城東
宝馬驟絶景　錦衣入新豊
依巖望松雪　対酒鳴絲桐
方学揚子雲　献賦甘泉宮
天書美片善　清芳播無窮
帰来入咸陽　譚笑皆王公
一朝去金馬　飄落成飛蓬
賓友日疎散　玉樽亦已空
長才猶可倚　不慙世上雄
閑来東武吟　曲尽情未終
書此謝知己　扁舟尋釣翁

白日　青天に在り　光を廻らして微躬を矚(み)る
恭しくも鳳凰の詔を承け　雲蘿の中より起たんと欲す
清切　紫霄迴かに　優遊　丹禁通ず
君王　顔色を賜い　声価　烟虹を凌ぐ
輿に乗り翠蓋を擁し　扈従す金城の東
宝馬　絶景を驟(は)せ　錦衣　新豊に入る
巖に依り松雪を望み　酒に対して絲桐を鳴らす
方に揚子雲に学び　賦を甘泉宮に献ず
天書　片善を美し　清芳　播きて窮まり無し
帰り来りて咸陽に入り　譚笑するは皆王公
一朝　金馬を去り　飄落して飛蓬と成る
賓友　日び疎散　玉樽　亦た已に空なり
長才　猶お倚るべく　世上の雄に慙じず
閑かに来(な)す　東武吟　曲尽きて情未だ終わらず
此を書して知己に謝し　扁舟もて釣翁を尋ねん

古を慕い世俗をわらい、平素より道理を会得したひとの風にあこがれていた。

ちょうど明主を補佐し、深くお辞儀して手柄からすっぱりと辞去することを願っていた。
太陽が青い空にあり、すみずみまで照らしてつまらぬ身にも目をかけてくれた。
うやうやしくも鳳凰の詔を頂戴し、雲なすかずらのなかから身を立てようとした。
清らかに澄んで紫の空ははるかに、ゆったりとした歩みで朱塗りの禁中に踏み入った。
君王はご機嫌よろしく拝謁をたまわり、名声は煙や虹をも凌ぐほど高く上った。
輿に乗りみどりの覆いを従えて、黄金の都の東へとおともする。
宝飾の馬は名馬絶景のように疾駆し、錦の衣を着て新豊県に入った。
岩によりかかり松に積んだ雪をながめ、酒を前にして琴をかきならす。
ちょうど揚雄にならって、甘泉宮にて賦を献上した。
天子は書をくだしてわが頌歌をおほめになり、清らかな匂いがあたり一面にふりまかれた。
帰ってきて咸陽の街に入ると、語らい笑いあう者はみな王侯貴族ばかり。
ある朝、金馬門を去ることとなり、吹き落とされて風に舞う根無し草となった。
賓客や友人は日に日に疎遠になり、玉の酒樽もまたからになってしまった。
すぐれた才能はなお自負するところがあり、世の英雄にはじるものではない。
しずかに東武吟をうたう。曲は尽きても気持はまだ尽くしていない。
これを書いて知己に別れを告げ、ひとひらの舟で釣りをする老人を探そう。

朝廷の度重なるお召しに仕方なく腰をあげ、しかし任官の要請は固く辞して還山の詞を致す、おきまりの所作が隠逸の伝記には書かれてきた。詩題の「還山」は入廷が隠逸挙人によることの名残を遺そう。しかし本文ではそうした隠逸の理想的なあり方を離れ、隠逸的人士が自己のキャリアをどのように思い描くか、ひとつの例を示すような内容となっている。それによれば、世俗をわらい賢人達士の風にあこがれながら、自己の修養に専心するのではなく、明主を補佐し功業成った暁には身を引くという、もうひとつの行き方が見てとれる。はたしてそのとおり、天子のめぐみを得て宮中に出入りする身分となった。驪山への行幸に扈従して名声をまとうことにもなった。しかしそれも束の間、ひとたび翰林の地位を去ると交友関係も失ってしまったと。楽府題「東武吟」は、老兵が時事の変移を嘆き君恩を思慕する内容により鮑照が、宮廷を辞去し隠遁する内容により沈約が、それぞれ作っていた（鮑照「時事一朝異、孤績誰復論。……棄席思君幄、疲馬恋君軒」沈約「逝辞金門寵、去飲玉池流」『楽府詩集』巻41相和歌辞十六楚調曲上）。作中に「東武吟」を歌うというのは、これらを踏まえてのこと。このたびの辞職は病を理由に申し出られたものでない。この詩には述べられないが、李陽冰の「草堂集序」には、同僚の誹謗により帝に疎んじられたと。賀知章ら朝廷の友人は謫仙の歌を贈ったが、多くは彼の意を得ないことを歌っていた。天子はもはや引き留めることができないのを知り、賜金して放還した、という（「醜正同列、害能成謗、格言不入、帝用疎之。……朝列賦謫仙之謌凡数百首、多言公之不得意。天子知其不可留、乃賜金帰之」集巻1）。その同僚とは、魏顥「李翰林集序」によれば張垍であるという（「許中書舎人、以張垍讒逐、游海岱間」集巻1）。こうして伝記の書き方は、隠逸型に賢人失志の要素が加わったものとなっている。

もうひとつが五言絶句による「初出金門尋王侍御不遇詠壁上鸚鵡」詩（集巻23）。こちらも題注に「勅放帰山

留別陸侍御不遇詠鸚鵡」という別の題名を記す。

落羽辞金殿　孤鳴託繡衣　羽を落として金殿を辞し　孤鳴して繡衣に託す
能言終見棄　還向隴山飛　能く言うも　終に棄てられ　還って隴山に向かいて飛ぶ

羽が抜け落ちて金の御殿を辞去し、ひとり声を上げて繡衣のひとに気持を託す。
じょうずに物言うたがしまいに捨てられ、隴山の方へ帰ろうと飛んでいく。

訪問した相手に会えず詩を書き遺す、その場で目にしたものを詠みこむ、そうした仕方に則った作。その際、じょうずに物言う鸚鵡にみずからを喩えるように、機知を効かせた。相手の王某、ないし陸某が官吏の弾劾を職務とする侍御史であるのは、たまたま知人に辞去の挨拶に出向いただけなのか、それ以上の意図あってのことなのかわからないけれども、「棄てられる」という言い方には不満の意、ないしはその原因をなすひとや事柄に対しての譏りの気持が含まれよう。「還山留別金門知己」詩が、複数のひとに宛てて自らの気持を述べるのに、自身の理想とするキャリアとそれからのずれを、楽府題を用いて穏やかなかたちで表明する、オフィシャルな性質を帯びた作であったのに較べると、こちらはひとりの相手に宛てられたということもあり、心情が吐露された感じを与える。李白が被った誹謗については、「翰林読書言懐呈集賢院内諸学士」詩にも「青蠅　相点じ易く、白雪　同調し難し。本是れ疎散の人、屢しば褊促の誚を貽らる」（集巻22）と述べられていた。

気酣登吹臺　李白は宮廷を辞去したあと、杜甫や高適と交遊をもった。このことを最も詳細に記すのは杜甫である。李杜及び高適の詩により当時の交往を明らかにする作業は聞一多「少陵先生年譜会箋」において基礎が築かれたが、その精度は高く、以後の繫年はこれにより導かれている。要点は以下のとおり。

天宝三載

夏、杜甫は李白と洛陽で出会う。（五古「贈李白」詩は当時の作「李侯金閨彦、脱身事幽討」）。

秋には梁宋へ。李白高適と吹臺琴臺で交遊。（後に「遣懐」詩「憶与高李輩、論交入酒壚。……気酣登吹臺、懐古視平蕪」、「昔游」詩「昔者与高李、晩登単父臺」などと。「贈李白」詩に「亦有梁宋遊、相期拾瑤草」と言い、洛陽で約束があったか。高適「東征賦」「登子賤琴堂賦詩三首」は同年作。「宋中別周梁李三子」詩「李侯懐英雄、骯髒乃天資」は李白を指すか。高適集に宋中の作が多く、時序が杜詩と合う。なかに当時の作を含もう）。

杜甫は王屋山に道士華蓋君を訪ねたがすでに亡くなっていた。（ことは「憶昔行」「昔游」詩に詳しい。杜甫には当時、学仙の志があっただろう。李陽冰「草堂集序」に、李白は放還後、陳留に李彦允を訪ね、北海高天師に請うて斉州紫極宮で道籙を授かったと。ふたりの来遊は同様の目的によるが明暗が分かれた。五古「贈李白」詩「亦有梁宋遊、相期拾瑤草」、次年の七絶「贈李白」詩「未就丹砂愧葛洪」はそのことに触れている）。

天宝四載

時に李之芳が斉州司馬。夏に北海郡太守李邕が斉州に来る。杜甫は従遊陪宴。ついで臨邑へ。

秋には兗州へ行き、東魯にいた李白と同遊。（ともに范氏の隠居を尋ね、杜甫は「与李十二白同尋范十隠居」詩、李白は「尋魯城北范居士失道落蒼耳中見范置酒摘蒼耳作」を詠む。杜甫が元逸人及び董錬師と出会ったのもこの頃か。杜甫に「玄都壇歌寄元逸人」があるが、盧世漼は李白の友人元丹丘のこととする）。

杜甫は西へ、李白は江東へと。魯郡城東の石門で別れ、その後会うことはなかった。（李白に「魯郡東石門送杜二甫」詩がある）。

劉孟伉『杜甫年譜』は聞一多の描いた行跡に沿い関係資料と詩繫年を増補する。そのなかで、たとえば天宝三載秋の事跡に関して、杜甫が王屋山に華蓋君を尋ねた際、李白が斉州に赴いた際、それぞれ両人が同行したなど、踏みこんだ解釈を示す部分がある。

詹鍈『李白詩文繫年』は両年の事跡をそのまま一年遅らせて天宝四、五載に懸けた。諸家の少陵年譜には天宝五載に事跡及び詩がないことが理由のひとつ。天宝三載から次年にかけて長安周辺諸州への遊蹤を組みこんだものである。この処置は以後の李詩繫年諸家に支持されなかったものの、この間の事跡が天宝五載を下限とするであろうことはひろく認められるところとなった。離京の際、商州経由の陸路によったことも詹氏『繫年』により加えられた（「答杜秀才五松山見贈」詩「角巾東出商山道、採秀行歌詠芝草」集巻17）。その他「沙丘城下寄杜甫」詩、「夢遊天姥吟留別（一作別東魯諸公）」が五載に懸けられ、また高適との関係では「送楊山人帰嵩山」詩について、『高常侍集』に「送楊山人帰嵩陽」詩があり、四載梁宋での作かと言う。

安旗・薛天緯『李白年譜』は聞氏説をもとに詹氏の所説を汲みとったものとなっている。天宝三載四月に商州

を経て東行。初夏に杜甫と洛陽で出会う。秋には高適杜甫と梁宋に遊ぶ。受籙については、夏にあらかじめ開封へ赴き李彦允に請い、冬に安陵へ行き蓋寰に真籙を造ってもらったうえで、済南郡紫極宮にて高天師より道籙を授与された、としている。天宝四載については聞氏説を踏襲、ただし同年秋に杜甫と別れて後、李白の江東への旅立ちは次年、天宝五載の秋とし、その直前に任城で病に臥していたことを組みこんでいる。「魯郡堯祠竇明府薄華還西京」詩の題注に「時久病初起作」と。この詩は詹氏『繫年』においても五載に懸けられていたが、存疑の作とされていた。「沙丘城下寄杜甫」詩も「夢遊天姥吟留別（一作別東魯諸公）」とともに五載に懸けている。

なお、詹氏『繫年』には、李邕に従遊陪宴した済南の名士に、杜甫高適とともに李白を加えていた。安薛両氏の年譜はこれを承けて、確証はないけれども李白が拝謁した可能性はあるとしている。

周勛初『高適年譜』は、天宝三載夏に李杜と梁宋を漫遊、夏秋間にともに単父に至った、秋末に別れて東征したとする。五載夏には李邕の招きに応じて臨淄郡に赴き、李白杜甫と再聚、李邕に従って北海郡に至ったと。聞氏と詹氏の説を折衷したかたちとなっている。李邕との関連については、李白「上李邕」詩を引きながら、李白が李邕に謁見したという表現をとっていない。また「送楊山人帰嵩陽」詩「送蔡山人」詩を、李白「送楊山人帰嵩山」詩「送蔡山人」詩との関連を示しながら天宝三載春に懸ける。楊山人については詹氏に言及があったが、周氏において蔡山人への作と並べて考察される。

孫欽善『高適集校注』及び同書附録「高適年譜」は、天宝三載に李杜との交遊、五載に李邕関連のことを懸けるのは周氏とおなじ。ただし天宝三載夏、李白と単父で会い、杜甫は秋に遅れて参加したとする。その後、高適は東征。周孫両氏とも「同群公秋登琴臺」詩を、序に「甲申歳」（＝天宝三）と記す「登子賤琴堂賦詩三首」と

同年作とするが、孫氏は詩題の「群公」を李白を含むと解釈するのが、高李が単父で出会ったとする根拠のひとつとなっている。この見方は「群公」と題する他の詩すべてに及ぶ。天宝四載、春から夏にかけて高適は李白と開封、洛陽に遊んだ。開封で李白とともに楊山人、蔡山人を同送。それらの作を周氏より一年遅らせる。洛陽遊行については「同群公宿開善寺贈陳十六所居」詩「同観陳十六史興碑」詩を根拠とし「群公」が李白杜甫を含むことを前提とする。天宝五載については、夏に李邕に陪遊したことに加えて、秋に李白杜甫と東平濮陽に同遊、冬に北海郡へ同遊して李邕に会ったとするが、これも「同群公登濮陽聖仏寺閣」詩「同群公題鄭少府田家」詩、「同群公十月朝宴李太守宅」詩「同群公出猟海上」詩の「群公」が李杜を指すという前提でのことである。

これら「群公」の表記をめぐっては、高適が安禄山の乱で敵対関係になった李白の名を伏せた可能性があるとの指摘がなされる（筧文夫「李白と高適」『唐宋文学論考』240―259頁）。杜甫と李白、杜甫と高適がともに相手の名を記しながら、李白と高適の間においてのみ相手の名を記さないのは確かに不自然である。かりにそのとおりであるなら三者の交往にこれらの詩はより多くの情報をもたらすことになる。ただし仮説のうえに立った論であり、ここでは判断を保留しておく。

なお、李白「梁園吟」を引いて李白離京後の航跡を描くのは、聞氏以来、周孫両氏にまで引き継がれた論点だが、しかし同作はより早く、李白が始めて長安を訪れた後の作であることが指摘される。郁賢皓『李白選集』は開元二十一年に、安薛両氏は開元十九年に懸ける。「我浮黄河去京関、挂席欲進波連山。天長水濶厭遠渉、訪古始及平臺間」（集巻7）という船旅の叙述は、商山経由の陸路によるこのたびの出関の状況に合わない。李白が三月放還から五月梁園を経て、六月単父琴臺で高適と会合するという、孫氏の描く行跡は、「同群公秋登琴臺」

詩が「登子賤琴堂賦詩三首」の同年作であるとしても、聞氏考証の瑕疵を受け継ぎ、「群公」が李白を含むという仮定に立つ。また、周氏孫氏とも天宝五載に李邕の事を懸けるのは詹氏説の影響であろう。周孫両氏がそれぞれ天宝五載とする一連の高適作を、さしあたり前年と解しておくのがよいだろう。

以上、諸説を勘案のうえ、ここでは三者交往の大筋に関しては、聞一多によって素描され安旗・薛天緯に整理されたところを、おおむね妥当なものと認めておきたい。高李の関係については同送の詩に注目する。そのうえで隠逸挙人と玄宗の霊応との関係から、関連する詩を配置すると以下のとおり。劉孟伉『杜甫年譜』、詹鍈『李白詩文繫年』、安旗・薛天緯『李白年譜』『李白全集編年注釈』、郁賢皓『李白選集』、周勛初『高適年譜』、孫欽善『高適集校注』等に含まれる、三者の交往関係によるのではない作品単独の繫年については、諸家がどのように遊蹤の全体像を描くかに多く委ねられており、いま参考に付するのみ。

関係事跡と詩作（二）離京後

天宝三載

春　李白離京

夏　李白杜甫　遇於洛陽

秋　李白杜甫高適　同遊梁宋間

冬　李白授道籙　於斉州紫極宮

李白詩（安陵・斉州）

訪道安陵遇蓋寰為予造真籙臨別留贈　奉餞高尊師如貴道士伝籙畢帰北海　（安＝天宝三）

◎十二月二十五日「親祭九宮壇大赦天下制」　有「高蹈不仕、遁跡邱園」者以礼徴送

天宝四載

正月六日　玄宗　聞空中有言

二月六日　陳希烈奏　蕭従一見玄元皇帝

春　李白高適　同送友人於開封

李白詩（開封）

※送蔡山人　送楊山人帰嵩山　（安・周＝天宝三、孫＝天宝四）

高適詩（開封）

※送蔡山人　送楊山人帰嵩陽　（安・周＝天宝三、孫＝天宝四）

◎五月某日　引見「高蹈不仕」挙人　処分

秋　李白杜甫　同遊魯郡　別於城東石門

秋　高適送沈千運於濮上

高適歌詩（濮上）

賦得還山吟送沈四山人　贈別沈四逸人　（孫＝天宝五）

冬　李白送岑勛於梁園

李白歌詩（梁園）

※鳴皐歌送岑徵君（時梁園三尺雪在清泠池作）　※送岑徵君帰鳴皐山　（安＝天宝五、郁＝天宝三）

天宝五載

李白病臥魯中

秋　病癒将遊江東

李白歌詩（東魯）

夢遊天姥吟留別（一作別東魯諸公）（安・郁＝天宝五）

天宝六載

春　杜甫在長安

杜甫詩（長安）

送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白

◎「高蹈不仕」挙関係事跡　※「高蹈不仕」挙人？　ゴシック＝歌行

安旗・薛天緯『李白全集編年注釈』　郁賢皓『李白詩選』　周勛初『高適年譜』　孫欽善『高適集校注』

脱身事幽討　天宝三載末に「高蹈不仕、遁跡邱園」挙の下詔、四載始め玄宗が大同殿空中に寿ぎの声を聞き、二月陳希烈の奏上、五月に挙人の引見がある。その間、天宝四載春に李白と高適が開封で挙に応じる蔡山人を見

送り、冬に李白が梁園で挙に応じたあと山に還る岑徵君を見送る。そこに至る状況を、あらかじめもう少し見ておく。

李白は離京したその年冬、斉州紫極宮で北海の高天師如貴より道籙を授与された。先に陳留採訪使李彦允を訪ねて取りなしを依頼したことが奏功した（李陽冰「唐李翰林草堂集序」「遂就従祖陳留採訪大使彦允、請北海高天師授道籙於斉州紫極宮」集巻1）。その年の初め、道士となることを請い辞去した賀知章と、結果としてはおなじような行動であり、陶弘景の跡を踏んだかたちとなる。天宝元年の隠逸挙人に応じたと目される呉筠もおなじ行為に及んでいる（権徳輿「中嶽宗元先生呉尊師集序」「天宝初、玄纁鶴版（一作書）、徵至京師。用希夷啓沃、脗合玄聖。請度為道士、宅於嵩丘。乃就馮尊師斉整受正法。初梁貞白陶君以此道授昇玄王君、自王君至先生、凡五代矣。皆以陰功救物、為王者師」『文苑英華』巻704、『全唐文』巻489）。李白もこうした風に倣ったものであろう。

ところで李白との邂逅は杜甫を元気づけ、また「学仙の志」をも刺激したであろう。夏日、洛陽で杜甫が贈った「贈李白」詩に言う。東都に二年居て世の煩わしさには嫌気がさした。菜食がいいとは思うがいつも生臭ものばかり食べている。仙家の食を摂れば身体にいいのはわかっている。しかし貴重な薬のためのもとでがなく山野に分け入ることもない。李侯は金馬門に待詔されたお方だがいま身を脱して幽邃をたずねようとされる。あなたもまた梁宋へと遊び玉草を採ることを期しておられるのだ（「二年客東都、所歴猒機巧。野人対韉腥、蔬食常不飽。豈無青精飯、使我顔色好。苦乏大薬資、山林跡如掃。李侯金閨彦、脱身事幽討。亦有梁宋遊、方期拾瑤草」『杜工部集』巻1）と。李白の企てに言及するとともに、自身の志すところをも示唆している。

かくて杜甫自身も黄河を渡り王屋山へ華蓋君を尋ねることとなった。秋日、李白や高適らと梁宋の地に酔舞行

歌し（「遣懐」詩「憶与高李輩、論交人酒壚。両公壮藻思、得我色敷腴。気酣登吹臺、懐古視平蕪。芒碭雲一去、雁鶩空相呼」集巻7、「昔遊」詩「昔者与高李、晩登単父臺。寒蕪際碣石、万里風雲来。桑柘葉如雨、飛藿共徘徊。清霜大沢凍、禽獣有余哀」集巻6）、後に独行したのであろう。険しい山道を踏みたどり着くと、しかしそのひとはすでに亡く茫然とする。暗い林の岩室に伏して、仙人が舞い降りる幻を見る（「昔遊」詩「林昏罷幽磬、竟夜伏石閣。王喬下天壇、微月映皓鶴」集巻3）。あるいは遺蹤をたどりそのひとを想い起こす。玄圃臺や滄洲はぼうっとしてひろがり、黄金のはたや羽衣はしなやかにひるがえる。いたずらに嘆いて在りし跡を手でなぞり、今に至るまでなお夢に想うばかり（「憶昔行」「玄圃滄洲莽空闊、金節羽衣飄婀娜。……徒然咨嗟撫遺迹、至今夢想仍猶佐」集巻8）と。この時期の杜甫の志向、それを思い起こす詩作に、李白の影響があったであろうことは想像に難くない。

さて李白の方は、道籙授与の儀礼にさきだって渡河北上、安陵で道士蓋寰に遇い「真籙」をこしらえてもらった。高如貴による伝授の儀礼のためにあつらえたものか。別れ際に贈った詩にはその符籙がどのようなものか描かれている。「訪道安陵遇蓋寰為余造真籙臨別留贈」詩（集巻9）に言う。

清水見白石　仙人識青童　　清水　白石を見　仙人　青童を識る
安陵蓋夫子　十歳与天通　　安陵の蓋夫子　十歳にして天と通ず
懸河与微言　談論安可窮　　懸河と微言と　談論　安んぞ窮まるべし
能令二千石　撫背驚神聡　　能く二千石をして　背を撫し神聡に驚かしむ
揮毫贈新詩　高価掩山東　　揮毫して新詩を贈り　高価　山東を掩う

至今平原客　感激慕清風　今に至るまで平原の客　感激して清風を慕う
学道北海仙　伝書蕊珠宮　道を北海の仙に学び　書を蕊珠宮に伝えらる
丹田了玉闕　白日思雲空　丹田　玉闕を了し　白日に雲空を思う
為我草真籙　天人慙妙工　我が為に真籙を草す　天人　妙工なるに慙ず
七元洞豁落　八角輝星虹　七元　豁落洞（とお）り　八角　星虹輝く
三災蕩璇璣　蛟龍翼微躬　三災　璇璣に蕩（たいら）ぎ　蛟龍　微躬を翼（たす）く
挙手謝天地　虚無斉始終　手を挙げて天地に謝し　虚無に始終を斉しくす
黄金献高堂　答荷難克充　黄金　高堂に献ずるも　答荷　克充し難し
下笑世上事　沈魂北羅酆　下に世上の事を笑い　魂を北の羅酆に沈む
昔日万乗墳　今成一科蓬　昔日　万乗の墳　今は成る一科蓬
贈言若可重　実此軽華嵩　贈言　若し重んずるべくんば　実に此れ華嵩を軽しとせん

清らかな水に白い石がよく見える、そのように仙人は仙童をよく見極める。
安陵の蓋先生は、十歳で天と通じていた。
立て板に水の弁舌と微かなことばで、談論すればやむことがない。
二千石の大名が、その背中をさすり聡明さに感嘆する。
筆を揮って新作の詩を贈ると、たかい評価は山東一帯を覆いつくす。

これまでずっと平原の人士は、感じ入って清らかな道風を思い慕っている。
道を北海の仙人から学び、書を上清境蕊珠宮において伝授された。
臍下三寸の丹田に腎中白気の通ずる玉闕が掛かり、白昼に雲間に入ることを思量する。
わたしに豁落七元真籙を書いてくれたが、妙なるできばえは天人さえ恥じいるほど。
耳目鼻口七竅の元気はからりととおり、八角の文字は星や虹のかがやきを放つ。
厄災は北斗璇璣の星に守られてやみ、龍や蛟がわたしの身体をささえて飛んでゆく。
手を挙げてこの世界に別れを告げ、虚無と生死をおなじくする。
黄金を立派な殿堂に捧げたとしても、ご配慮に充分に報いるのはむずかしい。
世俗の事柄を見下して笑い、魂を鬼王の住む北の羅酆山にひそませる。
むかし万乗の君であったひとの墓が、いまでは蓬草が生う土塊となっている。
贈ることばがもし貴いとしてくれるなら、ほんとうに華山嵩山さえ軽いとしよう。

幼少より発揮された仙才に、権力者をもうならせる微言と談論。加えて山東平原一帯の士がみな慕う詩才。そのひとの器量を褒め称えて修養について述べていく。師は北海の高天師、李白がいま授籙を企図するそのひと。道を上清境蕊珠宮に比せられる某道観にて伝授された。続く一句「丹田了玉闕」について、宋の楊斉賢、清の王琦らは『黄帝内景経』及び『黄帝外景経』を用いて注釈している。『李白全集校注彙釈集評』注釈にはそれらを整理して「丹田」は臍下三寸、元気を呼吸して収める部位（『黄帝外景経』上部経第一「呼吸廬間入丹田」務成子注

「呼吸元気、会丹田中、丹田者、臍下三寸、陰陽戸」『雲笈七籤』巻12）。「玉闕」は腎中白気が肺と通ずる部位（『黄帝内景経』肺部章第九「肺部之宮似華蓋、下有童子坐玉闕」梁丘子注「童子名皓華、肺形如蓋、故以下言之。玉闕者、腎中白気、上与肺連」『雲笈七籤』巻11）。「了」は懸かる意であるとしている。「丹田」「玉闕」がどのように関係作用するのか、そのメカニズムの説明は容易ではないが、要するに蓋寰が内丹術を行うさまを言うらしい。その功が成って白日昇天を観想するのだと。「真籙」は八角が光芒を垂れるような書体によって書かれている。また厄災消除、延年不老の効験を窺わせる。『李白全集校注彙釈集評』注釈及び備考には、これが「豁落七元真籙」である可能性を指摘している。同書引く任継愈主編『中国道教史』（第9章「唐代道教法籙伝授」387頁）には「上清部法籙」のひとつとして「豁落七元真籙」を挙げ、「七元」とは日月及び五星、相伝は高上玉帝元皇道君が九天丈人の伝えるところを受け、作用は「威懾十方、通真達霊」、道徒は修行九年の後、上清仙境に飛行することができると言う。またこれは「招霊致真摂魔籙」と同時に併せ授けられ、授与には上清法師として一定の徳行修養が要求されるとも。もしこれらの符籙を受けたとすれば、李白に相応の修養があり、それが認められてであることになる。最後にことばを尽くして謝意を述べ締め括る。恩に報いるには黄金でも充分でない。この詩を喜んでくれるなら華嵩さえ軽いというもの。李白の嬉しさがこぼれるようなおおげさな比喩となっている。

斉州へと引き返した李白は、当地の紫極宮で道籙授与の儀礼に臨んだ。いま『隋書』経籍志により「受道の法」を示せば以下のとおり。

其受道之法、初受五千文籙、次受三洞籙、次受洞玄籙、次受上清籙。……受者必先潔斎、然後齎金環一、并諸贄幣、

以見於師。師受其贄、以籙授之、仍剖金環、各持其半、云以為約。弟子得籙、緘而佩之。

道を受ける法式は、初めに五千文籙を受け、次に三洞籙を受け、次に洞玄籙を受け、次に上清籙を受ける。……受けるものは先に物忌みし、それから金環ひとつ及び進物諸品を携えて、師に見えなければならない。師は進物を受けとり法籙を授与し、そこで金環を割ってそれぞれ半分を持ち、これにより約束とする。弟子は法籙をもらったら封をして携帯する。

以上は概略を述べたまでで、実際には道流位階の別によりさまざまな差異がある（任継愈主編『中国道教史』第8章「唐代道教経戒伝授」第9章「唐代道教法籙伝授」及び小林正美『唐代の道教と天師道』第2章「天師道における受法のカリキュラムと道士の位階制度」参照）。李白の場合どうであったか。羅宗強によれば、「戒律」は受けず「経文」のみの授与である。相応に高次のものであり、十五才で入道し段階を踏んだうえでここに臨んだのではないかと（「李白的神仙道教信仰」『中国李白研究』一九九一年集20―33頁）。ともあれ道籙は無事授かった。李白は師の北海郡への帰還に際し「奉餞高尊師如貴道士伝道籙畢帰北海」詩（集巻15）を贈り餞している。

道隠不可見　霊書蔵洞天　　道隠れて見るべからず　霊書　洞天に蔵す
吾師四万劫　歴世遞相伝　　吾が師　四万劫　歴世　遞して相伝えらる
別杖留青竹　行歌躡紫煙　　別杖　青竹を留め　行歌　紫煙を躡(ふ)む
離心無遠近　長在玉京懸　　離心　遠近無し　長(とこしえ)に玉京に懸かる

道は深奥にかくれて見ることができず、老君の霊書は洞天にしまわれている。
わが師は四万劫ものあいだ、時代を越えて送り継がれて伝授されたのである。
別れに杖として青竹を留めてくれた。歌をうたい紫のもやを踏み飛んでゆく。
別離の気持は遠い近いとなく、ずっとあなたのおられる玉京にかかったまま。

隠れて見えず洞天にしまわれた道の秘要。四万劫の時を経て我が師へと伝授された。その師からわたしは法籙を受けたのだ。「別杖」は費長房の故事。長房は壺公からもらった青竹をかたしろに入道。帰還の際に騎った竹杖は龍の化身であったという（「翁乃断一青竹、度与長房身斉、使懸之舎後。家人見之、即長房形也、以為縊死、大小驚号、遂殯葬之。長房立其傍、而莫之見也。……長房乗杖、須臾来帰、自謂去家適経旬日、而已十余年矣。即以杖投陂、顧視則龍也」『後漢書』巻82下費長房伝）。わたしも追いかけて仙境へと遊びたい。お慕いする気持は距離を超え、あなたの居ます玉京にかかっている。師に捧げたものだからだろう、蓋寰への詩に較べてあらたまった感じの物言いとなっている。

後日出会う魏顥は、李白の道士としてのいでたちに触れ「曾て道籙を斉に受け、青綺冠帔一副有り」（「李翰林集序」集巻1）と述べている。

採珠勿驚龍　天宝三載十二月二十五日、李白が斉州で道籙を受けた冬の末、玄宗皇帝は九宮貴神を東郊に祭祀

し天下に大赦を宣布。その際、『孝経』の家蔵誦習と「孝勤過人、郷閭欽伏」者の推挙、及び「高蹈不仕、遁跡邱園、遠近知聞、未経薦挙」者の徴送を命じた（孫逖「親祭九宮壇大赦天下制」『唐大詔令集』巻74九宮貴神、『登科記考』巻9、『全唐文』巻310）。年が明けて四載正月六日、帝は大同殿で登壇し祈願、そのおり黄素の文が飛んで空中に寿ぎの声を聞いた（蕭宗「賀内道場霊異表」『全唐文』巻45、『冊府元亀』巻54）。同夜、臣下も同様の体験をする（中書門下「賀玄元皇帝霊応表」『全唐文』巻962、『冊府元亀』巻54）。二月六日、陳希烈が奏上、太清宮道士蕭従一が見聞したという玄元皇帝のメッセージを伝える（陳希烈「道士蕭従一見玄元皇帝奏」『全唐文』巻345、『冊府元亀』巻54）。李白と高適が開封で友人を見送ったのはこの頃のこと。ひとりは嵩山に帰ろうとする楊山人であり、もうひとりはこれから都へ上ろうとする蔡山人である。前者楊山人に対する詩は以下のとおり。

送楊山人帰嵩山　　李白（集巻15）

我有万古宅　嵩陽玉女峰　　我に万古の宅有り　嵩陽の玉女峰
長留一片月　挂在東渓松　　長に一片月を留め　挂けて東渓の松に在り
爾去掇仙草　菖蒲花紫茸　　爾去きて仙草を掇（と）る　菖蒲　紫茸を花さく
歳晩或相訪　青天騎白龍　　歳晩　或は相訪ねて　青天に白龍に騎（の）らん

わたしには万古悠久のすみかがあり、それは嵩陽の玉女峰にある。
ひとひらの月をずっと引き留め、東の渓谷に生う松の枝に掛けている。

あなたが仙人の草を摘みに行くと、菖蒲が紫のはなを咲かせるだろう。
歳の暮れに訪ねることがあったなら、青い空に白い龍に乗って昇ろう。

送楊山人帰嵩陽　高適（『全唐詩』巻213）

不到嵩陽動十年　嵩陽に到らざること　動(やや)もすれば十年
旧時心事已徒然　旧時の心事　已に徒然たり
一二故人不復見　一二の故人　復た見えず
三十六峰猶眼前　三十六峰　猶お眼前にあり
夷門二月柳条色　夷門二月　柳条の色
流鶯数声涙沾臆　流鶯数声　涙　臆を沾(うるお)す
鑿井耕田不我招　井を鑿(うが)ち田を耕し　我を招かず
知君以此忘帝力　知る　君　此を以て帝力を忘るるを
山人好去嵩陽路　山人　好し去れ　嵩陽の路
惟余眷眷長相憶　惟だ余　眷眷として長に相憶わん

嵩陽へ足が遠のいてもう十年、むかしの思いを懐いたままいたずらに時が過ぎた。
ひとりふたりの友人はいなくなってしまったが、三十六の峰はなお目の前に見えるよう。

夷門は二月にして柳の枝が彩りをそえ、枝を渡る鶯が幾声か啼くと涙で胸がぬれる。
井戸を掘り田を耕してわたしを招かない。君はこのことから帝の力など忘れているのかも知れぬ。
隠者よ、嵩陽への道をゆきたまえ。わたしはただ君のことを心にながく思い続けるだろう。

李白はおなじ隠逸者としての自身を前面に出して餞する。自分も嵩陽の玉女峰には終の棲家があり松に掛かる月がいつも心にある。あなたが行く頃には仙草が花を咲かせているだろう。歳の暮れには帰るつもりだからその時はいっしょに天へと昇ろうと。李白は開元二十二年頃、嵩山に隠居していた。

高適もこの隠者に寄り添いながら往年を思い起こす。以前よく訪れた嵩山に足が遠のいて十年、三十六峰がいまも目に浮かぶ。その頃の友はひとりふたりいなくなってしまった。春二月、いま古の大梁城東の夷門に柳が芽吹き、鶯が鳴くと涙が流れる。しかしあなたは自力で井戸掘り田を耕そうとして、あたかも帝徳を忘れるかのよう。そのさまはまことに隠逸の理想であり、わたしを招くことはないと。自身の隠逸の志は過去のこととして区切りをつけ、この友人との間には一線が画される。高李の自己認識の別がおなじ友人をとおしてはっきりと見てとれる。

なお、この楊山人とは、『李白集校注』によれば、李白が温泉宮に扈従した際「従駕温泉宮酔後贈楊山人」詩（題従「敦煌唐写本詩選残巻」）を贈った、そのひとであろうという。そこにも「当時の結交　何ぞ紛紛たる、片言に道合するは唯だ君有るのみ。待て　吾が節を尽くし明主に報ずるを、然る後　相携えて白雲に臥さん」（集巻8）と述べられていた。後者蔡山人に対する詩は以下のとおり。

送蔡山人　李白（集巻15）

我本不棄世　世人自棄我　我本世を棄てず　世人自ら我を棄つ
一乗無倪舟　八極縱遠舵　一たび無倪の舟に乗り　八極遠舵を縱にす
燕客期躍馬　唐生安敢譏　燕客躍馬を期す　唐生安ぞ敢て譏らんや
採珠勿驚龍　大道可暗帰　珠を採るに龍を驚かす勿れ　大道は暗帰すべし
故山有松月　遅爾玩清暉　故山に松月有り　爾を遅ち（ま）て清暉を玩ばん

わたしはもともと世を捨ててなどいない、世のひとのほうがわたしを捨てたのだ。
涯なくすすむ船に乗ったなら、あらゆる方向に世界の果てまで行き尽くそう。
燕の士は馬を疾駆しようと心に決めている、唐挙がどうして小馬鹿になどできるだろう。
珠を採取するのに龍を驚かせてはいけない、大いなる道はひそやかに始元へとたち戻る。
故居の山には松にかかる月がある。あなたを待って清らかな光を愛でることにしよう。

送蔡山人　高適（『全唐詩』巻213）

東山布衣明古今　東山の布衣　古今を明らかにし
自言独未逢知音　自ら言う　独り未だ知音に逢わざると
識者閲見一生事　識者閲見　一生の事

到処豁然千里心　到る処　豁然たり　千里の心
看書学剣長辛苦　書を看　剣を学び　長く辛苦す
近日方思謁明主　近日方に思う　明主に謁するを
斗酒相留酔復醒　斗酒相留めて　酔い復た醒む
悲歌数年涙如雨　悲歌数年　涙　雨の如し
丈夫遭遇不可知　丈夫遭遇　知るべからず
買臣主父皆如斯　買臣主父　皆　斯の如し
我今蹭蹬無所似　我　今　蹭蹬　似る所無し
看爾崩騰何若為　爾が崩騰するを看　何若か為さん

東山の無官の人は歴史を通覧し、自分で言う、己の価値を知るものに逢っていないだけ。
識者に謁見するのは一生の大事、千里も遠しとせずからりとした心でどこにでも行く。
書を読み剣術を学んで長らく苦労したが、近ぢか聖主に拝謁することを思い量っている。
一斗の酒で引き留めて飲み酔っては醒め、悲歌慷慨すること数年、涙が雨のよう。
大丈夫の人生はどこでどうなるかわからない、朱買臣や主父偃らはみなそのようであった。
わたしはいま道にふみ迷い似る所がない、あなたの勇躍を見てもどうしようもない。

李白はおなじ隠者としての立場に立ちながら、都へと向かうこのひとに対しては一転して厳しいことばを贈り餞する。わたしから世を捨ててなどいない、世がわたしをすてたのだ。隠逸者としてのたてまえはどこかへ飛んで、本音が漏れる。かくなるうえは世界の果てまで行き尽くすことにした。あなたは蔡沢のように世に躍り出ることを思っておられる。唐挙の顔相占いなどあてになるものか。自らの信ずるところを行けばよい。だがくれぐれも用心なさい。驪龍の顎の下にある珠を採るのは並大抵のことではない。おおいなる道はひっそりと始元へ復帰する。そのように無為の心で臨まれるよう。わたしは故居の山で月を愛で君を待つとしよう。蔡山人はこの年の「高蹈不仕、遁跡邱園」挙に応じたと見て間違いないだろう。李白のことばは、おなじ隠逸挙人により奉職したものでなければ為しえない、厳しくも思い遣りある助言となっていよう。

高適もおなじく期待に胸ふくらむこのひとのさまを捉える。学問を積んできたが己の価値を知るひとに遇わなかった。だがこれまでの苦労が報われる機会が訪れた。近日中に明主に拝謁がかなうという。市中に飲んで酔っては醒め、悲歌慷慨すること幾歳月。大丈夫の人生はどこでどうなるかわからない。その叙述には高適自身の像が重なる。しかし一躍世に出ようという君に比べて我が身はどうか。道に踏み迷い似るところがないと。高適は開元二十三年に応徴入京（「酬秘書弟兼寄幕下諸公」序「乙亥歳、適徴詣長安」『全唐詩』巻211）、下第を経験した。同年の制挙「才有王覇之略・学究天人之際・知勇堪将帥之選・政能当牧宰之挙」（『登科記考』巻8）に応じたと見られる。ここではカテゴリーが異なるけれども、おなじく制科に臨むひとに対し、羨む気持がにじむようだ。この後、高適は天宝八載の制挙「有道」科に及第（『登科記考』巻9）、任官することになる。

前年末の下詔に応じ当地まで来た蔡山人は、この後さらに長安までしばらく旅程を要する。李白の詩に楊山人

への詩とおなじく嵩山故居の松月を詠んでいることなども勘案すると、楊山人への詩が作られた二月に近い時期におなじく開封で、蔡山人への詩も作られたと見てよいだろう。

この間の李杜交往について詳細は不明だが、安旗・薛天緯『李白年譜』は杜甫「寄李十二白二十韻」の「醉舞梁園夜、行謌泗水春」（巻10）上句を天宝三載、下句を天宝四載と解して、この春より両者は再び行き来があったとしている。

探元入窅黙　天宝四載五月、玄宗による「高蹈不仕」挙人の引見が行われた。馬尚曾・常広心・賀蘭廸三人に追って沙汰ある旨、崔従一・王元瞻・韓宣・胡賁・趙元奬五人に緑衣一幅と物二十段、その他の者に物十段の下賜、及び賜食後に公乗もて帰還の旨、下勅があった。隠淪の志を奪わず、高尚の美を成さしめるため、という名目のもとに。後日、馬尚曾は左拾遺、常広心と賀蘭廸は金吾衛兵曹を授かる（「処分制挙人勅」『唐大詔令集』巻106制挙、『冊府元亀』巻98帝王部徴聘、『登科記考』巻9、『全唐文』巻32）。この挙について、王士源に言及がある。「孟浩然詩集序」（宋蜀刻本『孟浩然詩集』巻頭）に言う。

天宝四載徂夏、詔書徵詣京兆府、過与冢臣八座討論、山林之士麕至、始知浩然物故。……

若きより名山を訪ね、太白に隠訣を習い終南に亢倉九篇を得た王士源は、天宝四載徂夏に下詔徴聘され、大臣

宰相と討論する機会を得た。その際、山林の士が大勢あつまり、そこで始めて浩然が物故したことを知った、と。王士源は「高蹈不仕」挙に応じたことがわかる。ここに「徂夏」というのは『詩』小雅「四月維夏、六月徂暑」によれば六月だが、『冊府元亀』の記述によれば玄宗の挙人引見は五月（「天宝四年五月引諸州高蹈不仕挙人見詔曰……」巻98）。王士源は各地から集まった隠逸者仲間の情報により浩然物故を知った。隠逸者間のネットワークらしきものが存在することがわかる。孟浩然はそのなかでは大物として認知されていたようだ。

この夏、杜甫は北海郡太守李邕が斉州司馬李之芳を訪うたのに歴下亭及び新亭にて陪遊、詩を応酬した（杜甫「陪李北海宴歴下亭（時邑人蹇処士等在座）」李邕「登歴下古城員外孫新亭（時李之芳自尚書郎出斉州司馬製此亭）」杜甫「同前」集巻1）。高適もまた汶陽にいて、ときに東平郡の平陰亭にあった李邕より詩を寄せられ、ついで北池に泛舟同遊して、それぞれに応酬した（高適「奉酬李太守丈夏日平陰亭見贈」敦煌唐写本詩選残巻、「同李太守北池泛舟宴高平鄭太守」『全唐詩』巻214）。李白がこれらに関与したかどうかについては定かでない。詹氏『繫年』は李白「陪従祖済南太守泛鵲山湖三首」を杜詩と同時の作とするが、従祖済南太守が誰かわからず、杜詩が歴下亭及び新亭で、こちらは鵲山湖に舟を浮かべてなど、相違が著しい。新亭とはこのあと杜甫が臨邑に向かう際に立ち寄った皓山湖亭のことか（「暫如臨邑至皓山湖亭奉懐李員外率爾成興」集巻9）。

隠逸挙に応じた人士は、同年秋には故山に帰って行ったであろう。官職を得るなどはひとにぎり。ほとんどの者が徴招にあずかり賜物賜食の皇恩に浴したことを生涯の栄誉として故居に帰ってゆく。そうしたひとびとに対して「徴君」という称号が用いられる。王士源や蔡山人の名もむろん「処分の勅」にはない。高適が濮上で見送った沈千運も、あるいはこの挙に応じたひとりであったかもしれない。七言歌行と五言古詩による送別の作が贈

られている。前者「賦得還山吟送沈四山人」（『全唐詩』巻213）は以下のとおり。

還山吟　　還山の吟
天高日暮寒山深　　天高く日暮れ　寒山深し
送君還山識君心　　君が山に還るを送り　君の心を識る
人生老大須恣意　　人生老大なれば須らく意を恣にすべし
看君解作一生事　　看る　君が解（よ）く一生の事を作（な）すを
山間偃仰無不至　　山間に偃仰して至らざるなし
石泉淙淙若風雨　　石泉　淙淙として　風雨の若し
桂花松子常満地　　桂花　松子　常に地に満つ
売薬嚢中応有銭　　薬を売り　嚢中には応に銭有り
還山服薬又長年　　山に還れば服薬して　又た年を長らうべし
白雲勧尽杯中物　　白雲は勧む　杯中の物を尽くせと
明月相随何処眠　　明月　相随い　何処にか眠らん
眠時憶問醒時意　　眠る時　憶えよ　醒時の意を問うを
夢魂可以相周旋　　夢魂　以て相周旋すべし

山に還るうた。

そらは高く日は暮れ山は寒ざむとして深い、あなたが山に還るのを見送りあなたの心を察する。

ひとが生きて老いたならば心のままに過ごすべきだ。

みたところ君は一生の大事が何かわかっており、山中にのんびりと快適にすごしている。

石清水がさらさらとそそぎ雨風のよう、桂の花と松の実はいつも地面を埋め尽くしている。

薬を売って袋のなかにはきっとお金がたまり、山に還ったら服薬してさらに寿を延ばすだろう。

白い雲は杯のなかのものを飲みほせと促し、明るい月はよりそってどこに眠るのだろう。

眠ったら覚醒時の思いを尋ねるのを忘れないで、夢中の魂があいだをとりもってくれるだろう。

ここでは「賦得……」と、座の題として「還山のうた」を取りあげた。致仕帰隠の際に贈られた「還山」詩は、この高適の歌行に至って一座の応酬に供する題材となっている。李白の創作が隠士招聘の物語をなぞり、自身を投影するようにして特異な作品群を形成しつつあったのに較べ、高適の場合、隠逸に対する距離感も作用して、隠者の自適のさまを映す、通り一遍の表現に終始する。秋の空の下、寒い山に還るあなた。心の赴くまま清水流れ松子実る山中に棲む。薬を売り得た金でまた服薬。雲と酒と月を友として。君と夢の中で親しもう、と。応召の要素はここには見えない。後者「贈別沈四逸人」詩（『全唐詩』巻211）は以下のとおり。

沈侯未可測　其況信浮沈　沈侯　未だ測るべからず　其の況　信に浮沈す

十載常独坐　幾人知此心
乗舟踏滄海　買剣投黄金
世務不足煩　有田西山岑
我来遇知己　遂得開清襟
何意閾閾間　沛然江海深
疾風掃秋樹　濮上多鳴砧
耿耿尊酒前　聯雁飛愁音
平生重離別　感激対孤琴

十載　常に独坐す　幾人か此の心を知る
舟に乗りて滄海を踏み　剣を買いて黄金を投ず
世務　煩わすに足りず　田有り　西山の岑
我来りて知己に遇い　遂に清襟を開くを得
何の意ぞ　閾閾の間　沛然として江海深し
疾風　秋樹を掃い　濮上　鳴砧多し
耿耿たり尊酒の前　聯雁　愁音を飛ばす
平生　離別を重んず　感激して孤琴に対す

沈侯の人物は深くて測ることができず、そのおもむきはまことに世に随い浮き沈みする。十年のあいだただじっとして何もせず、どれくらいのひとがこの心を知っているだろう。出仕より舟に乗り海に入ったほうがよいとさえし、剣を購入するのに大金を惜しまない。世の仕事は彼をわずらわせるほどのことでなく、耕作する田地を西山の峰にもっている。わたしはやって来て真の友に出会い、かくてすがすがしい胸のうちを開くことができた。思いもよらなかった、至近の距離に、水あふるる江や海のような深さと出会うなどと。はやてが秋の樹木を払うように吹き、濮水のほとりでは砧の音がそこここに聞こえる。樽の酒をまえにして心は安らかでなく、つらなる雁はもの悲しげな声をとばす。

へいぜいより別れを大事なこととしている。昂った気持でひとり弾く琴に向かいあう。

「還山吟」が、類型的な隠逸像を白雲や明月など常套の品を引きながら、歌謡のスタイルに乗せて軽やかに提示するのに対し、五言古詩の方は、為人や信条、行動指針など、より内面に迫るような書き方となっている。そのひとがらは古の達道者のように深く測りがたく、世とともに巻舒浮沈する。権力を逃れ意気を重んじ、世事にわずらわされず農耕に勤しむ。わが胸のうちを語りあうことのできるのは君のようなひと。「沛然江海深」は相手の心の深さを言うと読みたい。別れは一大事。慷慨の気が迸る。高適はおのが懐抱を激発させている。

沈千運は元結『篋中集』の筆頭に名を記す詩人だが、プロフィールはその序においてすでに充分には明らかでない。「呉興沈千運は、独り流俗の中に挺んで、強く已溺の後を攘（はら）い、窮老不惑、五十余年、凡そ為る所の文は、皆　時と異なる。……沈公及び二三子、皆　正直なるを以て禄位無く、皆　忠信を以て久しく貧賤、皆　仁譲を以て喪亡に至る……」と。詩はそこに四首を載せ、『全唐詩』が一首を加えるのみ。同地での「濮中言懐」詩に「聖朝　賢良を優し、草沢に遺匿無し。人生　各おの志有るも、余に在りて胡れぞ激せざる。一生　但だ区区、五十にして寸禄無し。衰退して当に棄捐せらるるべく、貧賤にして毀譙を招く」とあるのを見ると、隠逸の士、ないしは不遇のひと。隠逸挙人の候補者にはふさわしい。『唐才子伝』には「天宝中、数しば挙に応ずるも第せず」と言うが、傅璇琮によれば基づくところが不明であるという（『唐才子伝校箋』第1冊426頁）。

周氏孫氏ともにこれら二首を李邕が済南に来たのとおなじ年に掛けている。いま聞氏説によって修正すれば天宝四載秋の作となる。沈千運が隠逸の挙に応じたかどうか、歌詩の内容からはわからない。かりに応挙帰山の作

でないとすると、「還山」歌詩が本来のシチュエーションを離れてよりひろく浸透していたことを示すことになる。いずれにしても、天下に隠逸の挙が施行された天宝四載の秋、おりしも挙人たちがそれぞれの居住地へと帰還するにあたり、各地で彼らを慰めて多くの歌が詠まれたであろう、そうした同時代の雰囲気を共有しながら、これら歌詩も作られたことに相違ない。

この秋、李白と杜甫は東魯にて交遊を重ねていた。杜甫の七言絶句「贈李白」詩は、前年に贈られた同題の五言古詩に比べて、親密さを増したふたりの関係を物語るようだ。秋になり自身をふり返るにいまなお根無し草、不老長生の仙薬は成らずかの葛洪に恥じいるばかり。とことん飲んで狂ったように歌いむだに日を過ごす、飛び揚がりのさばる英雄のようなふるまいは誰に見せようというのか（「秋来相顧尚飄蓬、未就丹砂愧葛洪。痛飲狂歌空度日、飛揚跋扈為誰雄」集巻9）と。自身のことを言うのか相手のことか判然としない。前半は自身、後半は相手のようにも見える。あるいは全体が李白の姿に投射された杜甫自身の像と言うべきであろうか。またふたり連れだって范氏の隠居を訪ねた際、杜甫「与李十二白同尋范十隠居」詩には言う。李侯の優れた詩句は往往にして陰鏗に似る。自分もまた東蒙の旅人となり君を兄弟のように慕っている。酔うて秋夜に一枚の布団で寝たり手に手を取って日び出かけたり。幽遠の境に遊ぶことを想い北の城郭に住まうひとを訪ねた。門を入るとすぐれたおもむきであり清清しい小僧さんが立っていた。……（「李侯有佳句、往往似陰鏗。余亦東蒙客、憐君如弟兄。酔眠秋共被、携手日同行。更想幽期処、還尋北郭生。入門高興発、侍立小童清。……」集巻9）と。李白の方は「尋魯城北范居士失道落蒼耳中見范置酒摘蒼耳作」、魯郡城北の范氏の居所をたずねたが道に迷い蒼耳の叢中に入りこんだ、范氏に酒をふるまわれ蒼耳の実をつまんで作る、と題して言う。ふと思いたって范氏を訪ねたが中途で路を失い、

蒼耳の棘に見舞われつつやっとたどりついた。門を入ると破顔一笑、主人はわが肘をつかんで「君は誰のため（かようなご苦労を）」。酒飲みを山菜と果実でもてなしてくれた。……（「忽憶范野人、閑園養幽姿。茫然起逸興、但恐行来遅。城壕失往路、馬首迷荒陂。不惜翠雲裘、遂為蒼耳欺。入門且一笑、把臂君為誰。酒客愛秋蔬、山盤薦霜梨。他筵不下箸、此席忘朝飢。酸棗垂北郭、寒瓜蔓東籬。……」集巻17）と。主人「君　誰が為なるや」とは、来路の辛苦を労うたのに、蒼耳のおみやげまで着けてと戯れを含めたか。最前、衣服に付着して来客を悩ませた蒼耳の実が、摘まれて酒宴に供される。ないしは酒宴でみずから衣服に付いた蒼耳をつまんで酒のあてにしてということか。いずれにしても「酒」に対して蒼耳が「さかな」の関係にあることが、この詩題を理解するうえで鍵となる。王琦注に蒼耳は「巻耳」のこととし、『爾雅翼』を引いて、葉と茎をおひたしにして食べるというのは（「葉青白色、似胡荽、白花細茎、可煮為茹、滑而少味」王琦輯註『李太白文集』巻20）、これが調理された「秋蔬」のひとつと見たのであろうが、腑に落ちない。郝懿行『爾雅義疏』に、蒼耳は実に棘があり若く柔らかなのを摘んで酒肴にすることができる（「按、今蒼耳、葉青黄色、円鋭而渋、……子如蓮実而多刺、嫛時亦堪摘以下酒」下一・釈草・巻耳苓耳）、というのが参考になる。ともあれ、范氏との交情を主題としながら、そこに至る前半の記述は、杜甫が李白への思いを綴っていたところ、ちょうど蒼耳のエピソードに席を譲る格好となっている。両者両様の歌いぶりが興味深い。ふたりはその秋のうちに魯郡城東の石門で別れた。李白「魯郡東石門送杜二甫」詩に言う。別れの酒に酔うた日びは数えきれず宴の池や高台は遍く経巡った。どうしてこの石門の路傍にふたたび金の樽を開けることがあるなどと言えよう。……（「酔別復幾日、登臨徧池臺。何言石門路、重有金樽開。……」集巻14）と。そのとおり相まみえる機会は訪れなかった。別後、李白は重ねて「沙丘城下寄杜甫」詩を寄せ贈り、友を思う心情を述

べている。酒にも酔えず歌にも楽しめぬ（「……魯酒不可酔、斉歌空復情。思君若汶水、浩蕩寄南征」集巻11）と。

李白が梁園で岑徵君を見送ったのは同天宝四載冬、そのひとが「高蹈不仕」挙から帰山する途次のことであろう。岑徵君とは詹氏『繫年』によれば岑勛のこと。これより先、開元年間末頃、彼は李白を慕い来訪、嵩山で元丹丘と逢い詩を寄せて李白を招いた（郁賢皓「李白与元丹丘交遊考」『李白叢考』106・107頁）。「酬岑勛見尋就元丹丘対酒相待以詩見招」詩に、「黄鶴東南より来り、書を寄せ心曲を写す。松に倚り其の緘を開けば、我を憶いて腸断続すと。千里を遙かなりと以わず、駕に命じて来りて相招く。中に元丹丘に逢い、嶺に登りて碧霄に宴す。酒に対して忽として我を思い、長嘯して清飆に臨む。蹇　予　未だ相知らざるとき、茫茫として緑雲垂る。俄然として素書及び、此の長き渇飢を解く。馬に策ちて山月を望み、途窮まりて階墀に造る。茲の一たびの会面を喜ぶこと、瓊樹の枝を睹る若し。君を憶いて我は遠来するも、我懽びて方に速かに至る。顔を開きて美酒を酌み、楽しみ極まりて忽として酔を成す……」（集巻16）と。ふたりの友は『将進酒』に「岑夫子、丹丘生」（集巻3）と併称される間柄である。このうち元丹丘には「西岳雲臺歌送丹丘子」が贈られていた。この旧知であり、かつ隠逸の挙に応じたもうひとりに対し、騒体を用いた歌行と五言古詩の作が贈られた。前者「鳴皐歌送岑徵君（時梁園三尺雪在清泠池作）」（集巻7）は以下のとおり。

若有人兮思鳴皐　　人有りて鳴皐を思う若し
阻積雪兮心煩労　　積雪に阻まれて心煩労す

洪河凌兢不可以径度　洪河凌兢として以て径度すべからず
冰龍鱗兮難容舠　冰龍鱗のごとく舠（ふね）を容れ難し
邈仙山之峻極兮　邈たる仙山の峻極まり
聞天籟之嘈嘈　天籟の嘈嘈たるを聞く
霜崖縞皓以合沓兮　霜崖　縞皓として以て合沓し
若長風扇海湧滄溟之波濤　長風　海を扇ちて滄溟の波濤を湧かす若し
玄猿緑熊　舔啖岌危　玄猿　緑熊　岌危に舔啖し
咆柯振石　駭胆慄魄　柯に咆え石を振わし　胆を駭かし魄を慄わし
群呼而相号　群呼して相号ぶ
峰崢嶸以路絶　峰は崢嶸として以て路絶え
挂星辰於巖嶃　星辰　巖嶃に挂かる
送君之帰兮　君の帰るを送り
動鳴皐之新作　鳴皐の新作を動かす
交鼓吹兮弾絲　鼓吹に弾絲を交え
觴清泠之池閣　清泠の池閣に觴す
君不行兮何待　君　行かずして何をか待つ
若反顧之黄鶴　反顧の黄鶴の若し

掃梁園之群英　梁園の群英を掃い
振大雅於東洛　大雅を東洛に振るう
巾征軒兮歴阻折　征軒に巾し阻折を歴
尋幽居兮越巇嶢　幽居を尋ねて巇嶢を越ゆ
盤白石兮坐素月　白石に盤(わだかま)り素月に坐し
琴松風兮寂万壑　松風に琴して万壑寂たり
望不見兮心氛氳　望めども見えず心は氛氳たり
蘿冥冥兮霰紛紛　蘿は冥冥として霰は紛紛たり
水横洞以下渌　水は横洞として以て下に渌(きよ)し
波小声而上聞　波は小声にして上に聞こゆ
虎嘯谷而生風　虎は谷に嘯いて風を生じ
龍蔵谿而吐雲　龍は谿に蔵れて雲を吐く
冥鶴清唳　飢鼯嚬呻　冥鶴清唳し　飢鼯嚬呻す
塊独処此幽黙兮　塊として此の幽黙に独処し
愀空山而愁人　空山に愀として人を愁えしむ
鶏聚族以争食　鶏は族を聚め以て争い食らい
鳳孤飛而無鄰　鳳は孤飛して鄰無し

蝘蜓嘲龍　魚目混珍　　蝘蜓は龍を嘲り　魚目は珍に混じる
嫫母衣錦　西施負薪　　嫫母は錦を衣（き）　西施は薪を負う
若使巣由桎梏於軒冕兮　　若し巣由をして軒冕に桎梏せしむれば
亦奚異乎夔龍蹩躠於風塵　　亦た奚（なん）ぞ夔龍を風塵に蹩躠せしむるに異ならん
哭何苦而救楚　　哭は何をか苦みて楚を救う
笑何誇而却秦　　笑は何をか誇りて秦を却けん
吾誠不能学二子沽名矯節以耀世兮　　吾　誠に二子が名を沽（う）り節を矯（あ）げ以て世に耀くを学ぶ能わず
固将棄天地而遺身　　固より将に天地を棄て身を遺（わす）れんとす
白鷗兮飛来　　白鷗　飛来して
長与君兮相親　　長に君と相親しまん

あるひとが鳴皐山のことを思うが、積雪にはばまれ心は疲れはててい る。
大河は凍りつき渡れない、氷は龍の鱗のようにはりつめて小舟を入れることが難しい。
はるかな神仙の山はとてもけわしく、天の笛の音がざわざわと聞こえる。
霜降る崖は白絹のように重なりあい、大風が海をあおって青海原の大波を湧かせるよう。
黒い猿や緑の熊が、高い山に舌を出し、枝にほえ岩をゆすぶり、胆を驚かせ魂を震えさせ、
群れなして呼び咆哮しあっている。

峰は高くけわしく道は絶え、星ぼしが岩の峰にかかる。
あなたが帰るのを見送って、鳴皐山の新作を披露する。
笛太鼓に交えて弦を弾き、清泠池上の楼閣に酌みかわす。
あなたは行かず何を待っているのか、振り返る黄色い鶴のようだ。
梁園の英才たちを一掃して、大雅のようなうたを洛陽に振るいおこす。
遠征の車に帳をおろし九十九折りを通り、隠棲の居をたずねてけわしい崖を越えてゆく。
白い岩に腰降ろして明月を愛で、風入松の琴曲をつま弾けば谷は静かに澄みわたる。
遠望しても見えず心は乱れ、女蘿はくろぐろとし霰は降りしきる。
水ははてしなく下に清らかで、波はかすかな音が上まで聞こえる。
虎は谷に鳴いて風を起こし、龍は谷に隠れて雲を吐く。
高く飛ぶ鶴は清らかに鳴き、飢えたむささびは顰め面でうめく。
ひとりこのひっそりとしたなかにいて、空っぽの山にうなだれ鬱ぎこむ。
鶏は群れ集まって貪り食い、鳳はひとり飛んでつれがない。
やもりは龍をあざけり笑い、魚の目は真珠にまじる。
醜女は綺麗な衣服を着、美人は薪を背負う。
巣父許由を官位爵禄に繋いだなら、賢臣夔龍を砂埃のなか足を引きずらせるのとおなじ。
申包胥は泣いたが何を苦しんで楚を救ったか、魯仲連は笑ったが何を誇り秦を退けたか。

わたしはほんとうにふたりが名を売り節を高くして世に輝やいたようなまねはできない。
もとより天地を捨て去り身を忘れようとするばかりだ。
白い鷗が飛んできて、ずっとあなたと親しくするだろう。

李白送別歌行の特色は、詠物の対象として山岳を題に採ることにある。この作法はおそらく入京以降、宮廷の詩人として身につけたもので、「白雲歌送劉十六帰山」などは初期の作例であろう。素材を山岳に換えて、より難しいチャレンジがなされる。「西岳雲臺歌送丹丘子」では神話的時間に溯り、いわば造物者の視点から、黄河の奔流に磨成され巨霊の掌に砕かれた西岳雲臺峰の山容が描かれた。ここでは「若有人兮……」と『楚辞』九歌「山阿の人」に擬しながら、旅立つ主人公に見立てた相手をいわばスクリーンとして、その脳裏に結ぶ、行こうとして行き着けない、ひとを拒む厳しい鳴皐の山容を映し出す。行こうとするわたしと、それを阻む積雪結氷のせめぎあいとして、力の具象化が試みられる。さらに行動が封じられることによる心の煩悶。こうした力動的映像が一座のひとびとに提供される。遙かなる仙山に響く天籟、真っ白な峰に吹き荒れる風。黒い猿や緑の熊が舌を出し咆哮する、そのおどろおどろしさなども併せて。これを枕として、鳴皐山を歌う新作を披露する旨が述べられ、管弦の奏楽と飲酒、別れの詩の応酬など、いま清泠の池閣で催される宴会のさまが同時進行で綴られてゆく。さらにこの時間を追い越して、相手が険しい道のりを経て山居にたどり着くさま、幽玄の境涯に佇むさまへと続く。こうしてあらかじめの旅が一座に共有される。「離騒」の趣旨を換骨奪胎したとも言えよう。最後に筆者のメッセージが述べられる。高潔な志ある者が不遇、卑小な者が高位に立つこの現実。世の中さかしまだ。申

包胥や魯仲連のように活躍したいけれど、できない以上は天地を棄てて身を忘れ去るのみ。白い鷗とともに。「虎・龍」「鶴・鼉」など動物の比喩は、冒頭に登場する「玄猿・緑熊」から導かれるが、その獣性は「鶏・鳳」「蜈蚣・龍」へと遷るにしたがって失せ、わかりやすいアレゴリーへと変質している。李白の送別歌行が、長安の体験を経て、詠物手法の技術面のみならず、相手の境遇に重ねて自身の心境を吐露する言志の器としての側面においても、おおきく変貌していることが見てとれる。

梁園は漢代、梁の孝王のもとに枚乗や司馬相如らが集った古の遊園。故址は宋州宋城県の郊外にあり、李白はこれより以前、最初に長安を訪れた後にも立ち寄って「梁園吟」を作った。そのときは「平頭の奴子　大扇を揺(うご)かし、五月も熱からず　清秋かと疑う」（集巻7）と盛夏であったが、このたびは冬の景色、三尺の大雪が降り積もっていた。厳冬の鳴皐山容は、この梁園の風景より導かれたものであろう。親友の帰山にあたりかねてより構想していた大作を披露したかとも思われるが、その場の即興にかかる部分もおおきいであろう。同年冬、李白が梁園にいたことは、虞城県令の李錫に献じた「対雪献従兄虞城宰」詩に「昨夜　梁園の雪、弟寒(こご)えて兄知らず」（集巻9）と言うのによっても傍証される。李錫は天宝四載から四年間、虞城県令の任にあった（「虞城県令李公去思頌碑（并序）」「天宝四載、拝虞城令。……陽無驕愆、四載有年」集巻30）。前年冬、李白は斉州で道籙を受け、次年冬にはすでに江東へと旅立っている。両作に言及される梁園の雪はこの冬のものとほぼ断定してよい。後者「送岑徵君帰鳴皐山」詩（集巻15）は以下のとおり。

岑公相門子　雅望帰安石　　岑公は相門の子　雅望　安石に帰す

奕世皆夔龍　中台竟三拆　　奕世　皆　夔龍　中台　竟に三拆す
至人達機兆　高揖九州伯　　至人は機兆に達し　高く九州の伯を揖す
奈何天地間　而作隠淪客　　奈何ぞ天地の間　而わち隠淪の客と作る
貴道皆全真　潜輝臥幽鄰　　道を貴びて　皆　真を全うし　輝を潜めて幽鄰に臥す
探元入窅黙　観化遊無垠　　元を探りて窅黙に入り　化を観て無垠に遊ぶ
光武有天下　厳陵為故人　　光武　天下有り　厳陵　故人為り
雖登洛陽殿　不屈巣由身　　洛陽の殿に登ると雖も　巣由の身を屈せず
余亦謝明主　今称偃蹇臣　　余も亦た明主を謝し　今は偃蹇の臣と称す
登高覽万古　思与広成鄰　　高きに登り万古を覽　思いは広成と鄰す
踏海寧受賞　還山非問津　　海を踏むとも寧ぞ賞を受けんや　還山は津を問うには非ず
西来一揺扇　共払元規塵　　西来　一たび扇を揺かし　共に元規の塵を払わん

岑公は宰相の家柄のおひと、名声は謝安のようだという評判に落ち着く。
累代みな賢臣夔龍のようであったが、中台の星が裂けてとうとう三たび失脚した。
至道のひとは事の機先を察知して、九州の長に就けようとの申し出を辞退する。
なんとまあ天と地のあいだに、かえって隠れ潜む者となっているとは。
道を尊ぶ者はみな本性のまことを全うして、輝きをひそめ静かなところに身を横たえる。

根元をさぐりほの暗いところにはいり、物化の理を見てとって涯なき境地にあそぶ。
後漢の光武帝が天子となったとき、厳子陵は旧知の仲であった。
洛陽の宮殿に登朝したときも、隠者の矜持をもち身を屈めることはなかった。
わたしもまた明皇帝のもとを辞去して、いまは傲り高ぶった臣下と称している。
高きに登り万古の歴史を通覧して、思いは至道の広成子と隣りあう。
海に飛びこんだとしても褒美など受けない、山に還ることは渡し場を尋ねるのと異なる。
西風が吹いてきたら扇子をひとあおぎして、ともに庾元規の起こした塵を払おう。

送別の歌行が、旅立つひとの心境や佇まい、宴のありさまを映像として提示するのに対し、五言古詩の方は、そのひとのプロフィールや道の修養、至った境地などディテールの叙述に傾く。岑氏の家柄は歴代宰相を出すほどだったが、没落していま君は隠淪の客となっている。だが道の深奥に達し涯なき境地に心を遊ばせて、世俗の価値にとらわれることはない。自分も明主のもとを辞去し思いを至道のひとに通わせている。西風が運ぶ貴権の者の塵をともに払おう。高適が沈千運を評した五言古詩に「沈侯未可測」とは『道徳経』の「古之善為士者、微妙玄通、深不可識」（『唐玄宗御註道徳真経』第十五章）を想起させる。いま李白が岑徴君を評することばは、道の体験についてさらに詳しい。「探元入窅默」とは『道徳経』の「道之為物、唯恍唯惚。惚兮恍、其中有象。恍兮惚、其中有物。杳兮冥、其中有精、其精甚真、其中有信」（第二十一章）及び『荘子』の「広成子……曰、……至道之精、窈窈冥冥。至道之極、昏昏默默」（『南華真経注疏』巻4外篇在宥第十一）を想起させるであろう。「高道

（不仕）」「高蹈不仕」両科は『道徳経』に言う「道」の体現者を対象とした挙人であったと思われる。自身は前者によりしばらく奉職、相手は後者に下第した。その差異はあるものの、ともに宮廷を辞去することとなった遣る方のない思いが、いま隠逸挙人を経験した後輩に対したときに漏らされている。そのように見てよいであろう。

岑氏の家系について、李詩に言うところは、岑参「感旧賦」序「吾門は三相なり。江陵公は中書令と為り太宗を輔け、鄧国公は文昌の右相と為り高宗を輔け、汝南公は侍中と為り睿宗を輔く。……武后　朝に臨むに逮び、鄧国公　是に由り罪を得、先天中、汝南公　又た罪を得て、朱輪翠轂は夢中の如し」（『文苑英華』巻91、『全唐文』巻358）と符合する。岑勛もこれらの末裔に連なることがわかる。李白の家系も、隴西李氏の末裔だが「中葉に罪に非ずして条支に謫居し、……神龍の始め、蜀に逃帰」（「草堂集序」集巻1）した、と称する。いわばふたりは似た者同士。このことが、いま岑勛応試の不首尾に触れて、憤懣が堰を切ったように吐瀉される背景をなしていよう。

夢遊天姥吟　李白が江東へと向けて東魯を発つのは、次年天宝五載の秋。それまでの動向について「魯郡堯祠竇明府薄華還西京（時久病初起作）」詩は、李白がしばらく病の床にあったという重要な情報を提供している。原注に「時に久しく病み　初めて起ちて作る」、本文冒頭に「朝に犂眉の騧に策うち、鞭を挙ぐるに力堪えず。強いて愁疾を扶けて何処に向かわん、角巾微服　堯祠の南」（集巻14）などの言い方から、相応の大病であったことが窺われる。病が癒えたのは「昨夜秋声　閶闔より来り、同庭木落　騒人哀しむ」と、秋になって。詩の終

わりには「爾は西秦に向かい　我は東越に、暫く瀛洲に向かいて金闕を訪わん」と旅立ちの意志が述べられている。このことは賀知章が老いを理由に辞職を願い出た際、病による神秘体験が直接の引き金となったことを想起させる。「知足帰老」を前面に出した公的な餞送とは別に、盧象の歌行が事柄の詳細を述べていた（「古歌辞送賀秘監帰会稽幷序」「寝疾累日、冥然如夢。……去年寝疾彌数旬、神鬼盈庭謀一老」）。その淵源をたどれば陶弘景に行き着く（賈嵩『華陽陶隠居内伝』巻上「恍然若有所適、無所覚知者。七日乃豁然自差云、覩見甚異」）。賀知章が帰郷して道士となったように、李白も斉州で道籙を得た。いまおなじように病という条件がそろった。李白が江東へと向けて旅立つ際、東魯の諸公に留別した作が「夢遊天姥吟留別（一作別東魯諸公）」（集巻13）。そこに病のことが言及されるわけではない。しかし作中の記事は、それに類似した、夢中の体験にもとづくことを思わせる。

海客談瀛洲　　海客　瀛洲を談（かた）る
煙濤微茫信難求　　煙濤微茫　信に求め難しと
越人語天姥　　越人　天姥を語る
雲霓明滅或可睹　　雲霓明滅　或は睹るべしと
天姥連天向天横　　天姥　天に連なり　天に向かいて横たわる
勢拔五岳掩赤城　　勢　五岳を抜き　赤城を掩う
天台四万八千丈　　天台　四万八千丈
対此欲倒東南傾　　此に対して倒れて東南に傾かんと欲す

我欲因之夢呉越　我　之に因りて呉越を夢みんと欲し
一夜飛度鏡湖月　一夜　飛んで度る　鏡湖の月
湖月照我影　湖月　我が影を照らし
送我至剡谿　我を送りて剡谿に至る
謝公宿処今尚在　謝公の宿処　今尚お在り
渌水蕩漾清猿啼　渌水蕩漾　清猿啼く
脚著謝公屐　脚に謝公の屐を著け
身登青雲梯　身は青雲の梯を登る
半壁見海日　半壁に海日を見
空中聞天鶏　空中に天鶏を聞く
千巖万転路不定　千巖万転　路　定まらず
迷花倚石忽已暝　花に迷い石に倚り　忽として已に暝る
熊咆龍吟殷巖泉　熊咆え龍吟じ巖泉を殷わす
慄深林兮驚層巔　深林を慄わし層巔を驚かす
雲青青兮欲雨　雲　青青として雨ふらんと欲し
水澹澹兮生煙　水　澹澹として煙を生ず
列缺霹靂　丘巒崩摧　列缺　霹靂　丘巒崩摧す

洞天石扇　訇然中開　　洞天の石扇　訇然として中開す
青冥浩蕩不見底　　青冥　浩蕩として底を見ず
日月照耀金銀臺　　日月　金銀臺を照耀す
霓為衣兮鳳為馬　　霓を衣と為し　鳳を馬と為し
雲之君兮紛紛而来下　　雲の君　紛紛として来下す
虎鼓瑟兮鸞回車　　虎は瑟を鼓し　鸞は車を回らし
仙之人兮列如麻　　仙の人　列すること麻の如し
忽魂悸以魄動　　忽として魂悸し以て魄動す
恍驚起而長嗟　　恍として驚起して長嗟す
惟覚時之枕席　　惟だ覚めし時の枕席あるのみ
失向来之煙霞　　向来の煙霞を失う
世間行楽亦如此　　世間の行楽　亦た此の如し
古来万事東流水　　古来　万事　東流の水
別君去兮何時還　　君と別れ去き　何の時か還らん
且放白鹿青崖間　　且らく白鹿を青崖の間に放ち
須行即騎訪名山　　須らく行くべくんば即ち騎りて名山を訪わん
安能摧眉折腰事権貴　　安んぞ能く眉を摧き腰を折りて権貴に事え

使我不得開心顔　　我をして心顔を開くを得ざらしめん

船乗りは瀛洲について話す、けむる波濤がぼうっとしてまことに探し求めがたいと。
越人は天姥山について語る、雲や虹がひらめきあるいは見ることができるかもしれぬと。
天姥山は天へと連なり天に向かって横たわり、勢いは五岳を抜いて赤城山に覆いかぶさる。
天台山は四万八千丈の高さだが、これに向かいあうと圧倒されて東南に傾かんばかり。
わたしはこれにより呉越の地を夢に見たいと思い、ある夜、月の照る鏡湖を飛んで渡った。
湖の月はわたしの影を照らし、わたしを剡谿へと送りとどけてくれた。
謝公霊運の住まいがいまなおそこにあり、澄んだ水がただよい猿が清らかに啼いている。
脚に謝公考案の下駄をはき、身体は雲のきざはしを登ってゆく。
絶壁のなかばで海から登る太陽が見え、空中に天の鶏の声が聞こえた。
岩がごろごろとして路はさだまらず、花に迷い石にもたれあっというまに暗くなった。
熊が吼え龍が呻いて石清水に響きわたり、深い林を震わせ何層にも重なる頂を驚かせる。
雲はくろぐろとして雨が降りそうで、水はしずかに湛えて水煙がたちこめる。
走る稲妻に轟く雷鳴、小山が崩れさる。洞天の岩戸は、轟音とともにぽっかりと開く。
あお暗くひろびろとして底が見えず、日と月が金銀のうてなを照り輝かせている。
虹をまとい鳳凰にまたがり、雲の君が夥しい数をなして降りてくる。

虎が瑟を弾き鸞が車を走らせ、神仙の人がごたごたと列をなしている。
咄嗟のことで魂が震え、あっと驚いてふうっとため息をつく。
ただ目覚めの寝床があるばかり、いましがたのけむりは失せていた。
世の行楽もまたこのようなもの、古よりこのかたすべては東に流れゆく水のよう。
君と別れて行ったなら還るのはいつになるか。
しばらく白い鹿を青い崖のあたりに放ち、行くとなればこれにまたがって名山を訪ねることとしよう。
どうしてしおたれて腰を折り権貴のひとに仕えて、顔を曇らせたままにしておれよう。

力の具象化による山岳の描写はここではさらに徹底され、天へと垂直に向かう山勢によって特徴づけられる。それは五岳をはるかに抜き去り、隣接する赤城山に覆いかぶさる。四万八千丈の天台山もこの勢いに圧されて東南に傾くという。旅立つひとの脳裏に鳴皐山容を映した工夫を承けて、ここではさらに仙島を語る船乗りを枕に、越人の語りに導かれて、雲と虹に包まれ捉えがたい天姥山が、力動的形姿を顕わにする。伝聞に興を発し実際の見聞へと赴く、その際に夢魂が先導するというかたちは、胡紫陽の飡霞楼に元演を見送った「冬夜於随州紫陽先生飡霞楼送烟子元演隠仙城山序」にも見えていた。「白　乃ち語りて形勝に及べば、紫陽　因りて大いに仙城を誇る。元侯　之を聞き、興に乗じて将に往かんとす。……夢魂　暁に飛び、淥水を度り以て先ず去く」（集巻27）。あこがれ、捉えるべくもない、求むべくもないものの追求。李白送別留別歌詩の発想の要点がここにあらわれている。

圧倒的な天姥の姿に触発され、ここでは送別から留別へ設定の変更にともない作中に登場した自身によって夢中の接近が試みられる。月の照る鏡湖上空の飛行。謝霊運の住居跡へと。時間の旅。登山の開始。道に迷い日が暮れる。異次元の時空。熊や龍の咆哮、風雨の気配。稲光に雷鳴、峰の崩壊。洞天の岩戸が開くと、なかはひろびろと別世界。日と月に金銀の高台が照り映える。クライマックスは神仙との遭遇。鳳に乗り鸞に牽かれ、おびただしい数の下降来臨。そこで目が覚める。情景は生き生きとして精彩にとみ、読む者を引きこむ。実際に見た夢を写したかと思わせるのは、夢がもつ予測不能の展開を作中に実現していることによるのだろう。その功はこれを物語る主体としての詩人本人に帰す。それと同時に、異次元の時空へと迷いこんでゆく筋書きは、流れを「離騒」に汲みながら、より近接するジャンルの存在を思わせる。たとえば王延齢「夢游仙庭賦」（『文苑英華』巻95、『全唐文』巻402）のような作が遺る。

葛稚川見素抱樸　傲世忘栄　　葛稚川　素を見わし樸を抱き　世に傲りて栄を忘れ
循潔白之道　吸元和之精　　潔白の道に循い　元和の精を吸い
泊乎意眹　飄然体清　　泊乎として意眹（あらわ）れ　飄然として体清し
於時秋風蕭蕭　秋夕凜凜　　時に秋風蕭蕭として　秋夕凜凜たり
野猿垂幕　山童薦枕　　野猿　幕を垂れ　山童　枕を薦む
須臾之間　乃安斯寝　　須臾の間　乃ち安らぎて斯に寝ぬ
神倏爾而逾邁　眇不知其所届　　神は倏爾として逾邁し　眇として其の届（いた）る所を知らず

紛溶溶而上馳　将若游乎天外
駕白鹿　驂斑麟
飛翠蓋　騰紅輪
横絶南斗　超淩北垠
出崑墟以騁志　過滄溟而問津
呵風伯　叱雷父
披天門　謁天宇
太一之居兮金碧堂
洞鬱密兮不見陽
蕊珠履地　雲屏帀廊
色剡剡其揚彩　爛煜煜以成章
旖旎旌節　襂纚羽裳
蒼龍吹篪　丹鳳為舞
洞轇轕乎東廂　此其大較也
若乃群仙之所盤薄
珠庭之所矱濩
曼以玉堂　映以朱閣

紛溶溶として上馳し　将に天外に游ぶ若からんとす
白鹿に駕し　斑麟を驂とし
翠蓋を飛ばし　紅輪を騰ぐ
南斗を横絶し　北垠を超淩し
崑墟を出でて以て志を騁せ　滄溟に過りて津を問う
風伯を呵し　雷父を叱し
天門を披き　天宇に謁す
太一の居す（いま）　金碧の堂
洞鬱密として陽を見ず
蕊珠　地に履み　雲屏　廊のごとく帀り
色剡剡として其れ彩を揚げ　爛煜煜として以て章を成す
旌節　旖旎たり　羽裳　襂纚たり
蒼龍　篪を吹き　丹鳳　為に舞い
洞轇轕たる東廂にあり　此れ其の大較なり
乃ち群仙の盤薄する所
珠庭の矱濩する所
玉堂に曼（はびこ）り　朱閣に映り

霊怪潜秘　光華相錯
陰陽不能授其寒暑
造化不能生其美悪
及乎上真降命　赤書爰作
速陽侯而波静　走姮娥而月落
値江妃之倩練　驚海童之閃爍
其翺翔曠遠者
嬉九垓　排三山
紫煙生　白雲間
偃蹇夭矯　翩綿縹緲
可見而不可攀
至夫霊草自然　珍木不死
餐霞咽液　乗鴻躡鯉
或隠山林　或游城市
斯実元都之能事　羌難測其云已
洪崖先生　方睟其容　頷其頤
曰中州之士也　爾来何遅

霊怪　潜秘し　光華　相錯わる若きは
陰陽も其の寒暑を授くる能わず
造化も其の美悪を生ずる能わず
上真　命を降し　赤書爰に作(おこ)るに及んでは
陽侯を速(め)して波静かに　姮娥走りて月落つ
江妃の倩練なるに値い　海童の閃爍たるに驚く
其れ翺翔の曠遠なる者は
九垓に嬉び　三山を排し
紫煙生じ　白雲間かなり
偃蹇夭矯たり　翩綿縹緲たり
見るべくも攀ずるべからず
夫れ霊草の自然なる　珍木の死せざる
霞を餐い液を咽み　鴻に乗り鯉を躡み
或は山林に隠れ　或は城市に游ぶに至っては
斯れ実に元都の能事　羌(ああ)　測り難しと其れ云うのみ
洪崖先生　方に其の容を睟とし　其の頤を頷きて
曰わく　中州の士や　爾来ること何ぞ遅しと

出秘訣　約真期　　秘訣を出し　真期を約す
挹華池之水　唱天関之詞　　華池の水を挹し　天関の詞を唱す
既乃避席屏気　拝命之辱　　既にして乃ち席を避け屏気す　拝命の辱きに
精皦皛兮従空浮　　精皦皛として空に従いて浮かび
長覚悟兮還旧邱　　長く覚悟して旧邱に還る
惟見塵書満屋　皓月生楼　　惟だ見る　塵書　屋に満ち　皓月　楼に生ずるを
渉化窮極　無跡難求　　化に渉り極を窮むるも　跡無く求め難し
豈荘周夢為蝴蝶　　豈に荘周の夢に蝴蝶と為りしか
蝴蝶夢為荘周歟　　蝴蝶の夢に荘周と為りしか
意者天聡明　神正直　　意うに天は聡明にして　神は正直なり
親其貞亮之概　照以元魁之極　　其の貞亮の概に親しみ　照らすに元魁の極を以てせん
双童兮何日再逢　　双童　何の日か再び逢わん
上清兮何時再陟　　上清　何の時か再び陟らん
掩空館而愁臥　撫長懐而歎息　　空館を掩いて愁臥し　長懐を撫して歎息す

葛稚川は素朴さをだいじにし、世俗を軽んじ栄誉を得ることをわすれ、
清くけがれのない道によりしたがい、根元のやわらいだ精気をすいこみ、

静かにおちついて思いがきざしあらわれ、軽やかでとらわれがなく姿はすがすがしい。
おりしも秋風がものさびしく吹き、秋の夕暮れは寒さきびしく、
野生の猿が帷をたれ、山中の童子が枕を進めてくれると、
あっというまに、よい心地がして眠りこんでしまった。
精神はたちまち越え行き、はるか遠くどこまでも進み、
みだれ湧きあがって上昇し、天の外へとさまよい出るよう。
白鹿の車を走らせ、まだらの麒麟をそえうまとして、
緑の幌で風をきり、赤い車輪を勢いよく回す。
南斗の星ぼしを横断し、北のはてを越え、
崑崙のおかをとびだして思いをはせ、滄溟のうみにたちよって渡し場をたずねる。
風の神、雷の神をしかりつけ、
天の門をひらいて、天の宮殿に拝謁する。
太一神天帝のおられる黄金と碧玉の御殿は、ひろく荘厳さに満ち太陽は見えない。
つぼみの珠玉が敷きつめられ、雲のついたてが回廊のように廻らされ、
鮮やかに輝いて光彩をはなち、華やかに光ってあや文様をなす。
旗がなびき、羽衣がたれ、
青い龍が篪のふえを吹き、赤い鳳凰が舞をまい、

ひろびろと深遠な東の部屋にいる。以上はその大略である。
さて群れなす仙人がわだかまり、珠のひろばに丹砂が敷きつめられ、
玉のうてないっぱいに散らばり、朱色の高殿に照りはえ、
あやしく不思議なものがひそみ、輝きが交錯するるさまは、
陰陽の気も寒さ暑さをあたえることができず、
造物主も美しさ醜さを生じさせることができぬほど。
真仙が命を下し、仙籍が書かれると、
波濤神陽侯を召して波はおだかやになり、姮娥は逃げて月が落ちる。
うるわしい江妃二女にめぐり逢い、わたつみのひらめき輝くのにびっくりする。
遠くはてしなく天翔けること、この世の果てへとあそび、三神山を押しのけて、
むらさきのもやが起ち、白い雲がしずかにたなびく。
威張りくつろぎ、翻ってかすかに、
見ることはできるが取り縋ることができない。
あらたかな草はあるがまま、珍らかな樹木は死ぬことがなく、
かすみを喰らい玉液を飲み、鴻にのり鯉魚にまたがり、
山林に隠れたり、都市に遊びに出たりするのなどにいたっては、
これはまことに仙都の優れたわざの持主であり、ああ推し量りがたいというほかはない。

仙人洪崖先生はちょうどそのとき顔をつやつやさせ、うなずいて、
言うことには、中国のひとよ、あなたは来るのがどうしてこんなに遅かったのか、と。
道の秘訣を取り出し、仙人として相まみえる約束をした。
崑崙の華池の水をくみ、天の関所の歌をうたった。
席を退いてから息をひそめた、拝命を身に余ることとして。
あきらかに輝いて空中にうかび、ひさしく夢から覚めてもとの丘に還ってきた。
ただ塵にまみれた書物が部屋いっぱいにあり、白い月が建物から上るのが見えるだけ。
変化を遂げて究極までつきつめたが、跡がのこらず探すのがむずかしい。
荘周が夢に蝶となったのだろうか、蝶が夢に荘周となったのだろうか。
思うに天は道理に明るく、神は正しく真っ直ぐである。
正しく誠ある節操をいつくしみ、始元の太極に照らし判断してくれるであろう。
ふたりの仙童にはいつまた逢うのだろう、上清界にはいつまた昇るのだろう。
がらんとしたやかたの門を閉じ、物思いをなぐさめてため息つく。

話の筋は、葛洪が秋日ふと眠りこんだおり、精神が天外へと飛翔して天宮へと到った。天帝に拝謁し、さまざまなものを目撃する。金碧の御殿は荘厳な輝きに満ち、龍が笛ふき鳳が舞う。群仙が集い霊怪が潜み、寒暑も美醜もない。姮娥や江妃らは真仙の命に従い、世界の果てまで天翔けるもの、仙都や山林で永遠の生を楽しむもの

などがいる。洪崖先生に秘訣を授けられ、再会を約束してもとの居所に戻ってくる、というもの。李白は洞天中の別天地、こちらは天外の仙庭と、相違はあるものの、夢に神仙世界を訪れ、輝く宮殿や霊獣、たむろする仙人を目撃、目覚めるともとの部屋、そして歎息という、設定から構成、措辞にいたるまで、両者は酷似する。王延齢は「開元時人」（『全唐文』）であるといい、おそらく李白の作に先だつ。李白がこの作を見ている可能性もあるが、直接の継承関係を議論するよりは、類似する作は他にも多く作られていたと考えた方がよい。それら湮滅した詩脈を想定したなかで李白の作の位置づけを考えるべきであろう。なお、盧象歌行が描く賀知章の体験も、こうした言説に連なるものであろう。『新唐書』賀知章伝では「夢に帝居に游ぶ」と括られていた。ともあれ王延齢「夢游仙庭賦」との比較からいくらかのことがわかる。

李白の作は垂直の力動性によって特徴づけられる。天姥の山勢は「天に連なり天へと向かう」。謝公の屐を着けた李白による登山「身は登る青雲の梯」。途中「空中に天鶏を聞く」。洞天の別天地で、見上げれば「雲の君紛紛として来下す」。あっと驚いて目が覚める「怳として驚起して長嗟す」。墜落の感覚。一方、王延齢の作は「離騒」の天界遊行に範を得た。「離騒」で天門より進めなかった主人公は「遠遊」では通過して天宮へと到るのだが（「命天閽其開関兮、排閶闔而望予。召豊隆使先導兮、問太微之所居。集重陽入帝宮兮、造旬始而観清都」）、そうした天上世界のありさまを、天の宮殿、群仙の侍る仙庭、仙都の内外と、賦の空間的な叙述仕方に従って、中心から外延へとより詳細に描き出したもの、と位置づけることができる。すなわち李白は全体の構成を既存の賦のモデルによりながら、仙庭の空間的な構造についての叙述は切り捨て、神仙の下降来臨にフォーカスし垂直の運動を軸として再編した。七言古詩による「西岳雲臺歌送丹丘子」、騒体による「鳴皐歌送岑徵君」を経て、ここで

は五七言句を主としながら、夢中遊行の場面は騒体を交える。山岳を主題とした送別歌行におけるスタイルの試みは、この留別の作にひとまずの完成をみた。他に七言古詩による「鳴皐歌奉餞従翁清帰五崖山居」及び五七言の長短句による「廬山謡寄盧侍御虚舟」がある。前者は詹氏『繫年』天宝五載（「鳴皐歌送岑徵君」と同時期）、安旗・薛天緯『李白全集編年注釈』天宝十載、後者は両者ともに上元元年の作と推定する。収めの部分、初唐七言歌行を承けた「万事東流水」の叙情が示されるのは、李白入京に始まる一連の歌行制作がいったん収束し、都市を主題とした初期の歌行へと回帰するようでもある。

さて玄宗皇帝の老子夢見以来の霊応と、李白の夢はどのように関係するだろうか。開元末年、夢にあらわれた老子が自身の形像の存在を告げ、真容が発見されて大同殿に安置される。画像が天下に頒布されると玄元皇帝降現の報告が地方に、翌天宝元年には首都長安になされる。これら慶事にともない行われた制挙により李白は登用の恩恵に浴する。三載春、職を解かれ離京。四載正月、玄宗は大同殿で祈願中に空中に寿ぎの声を聞く。同夜、臣下も同様の体験をしたと報告。二月、蕭従一が太清宮三清門に玄元皇帝を幻視、メッセージを受け取る。五載秋、東魯で李白の留別歌行が詠まれ、夢の体験が語られる。玄宗の夢に始まる一連の言説では、玄元皇帝が夢の閾を越えてこちら側の世界に姿をあらわしてきた。送別留別の歌行では、賀知章を見送った盧象の作を含めて、「離騒」を踏襲しこちらから天上世界へと赴くのだが、ここに至って両者の言説は近似する。蕭従一の報告する玄元皇帝降現の場面「今日五更、……行きて三清門に至るや、忽として一片の紫雲有り空より下る、兼ねて異常の音楽有り。忽然として夢みる如く、身心驚駭し、空中に異人、兼ねて仙童玉女有るを見る」（陳希烈「道士蕭従一見玄元皇帝奏」『全唐文』巻345、『冊府元亀』巻54）。李白が夢に神仙に遭遇する場面「霓を衣と為し　鳳を馬と為

し、雲の君　紛紛として来下す。虎は瑟を鼓し　鸞は車を回らし、仙の人　列すること麻の如し。忽として魂悸し以て魄動す」。神仙との接近、遭遇を語る言説の構造はおなじ。異なるのは蕭従一がメッセージの受信に成功し（「謂従者曰『我是玄元皇帝、可報吾孫、汝是上界真人、令侍吾左右。吾冥使天匠就助、成就訖、長衛護汝、受命無疆、災害自除、天下安楽』」）、李白が失敗したこと（「恍驚起而長嗟。惟覚時之枕席、失向来之煙霞」）。李白の言はあたかも蕭従一報告の陰画をなすようである。神仙との接触は失敗に終わることが「離騒」以来この種の作品における標準であることからすれば、蕭従一報告を記す陳希烈奏上文の方がイレギュラーであると言うべきかもしれないが。それはともかくとして、ここに李白自身の経歴に重ねあわせて思いを汲みとることは可能であろう。しかしそれは陳沆『詩比興箋』（巻3）が言うようなものでない。陳氏は、夢中登山の場面を金鑾召見に、魂悸魄動以下を宮廷放逐に寄託したと読んでいる。そうではなくて、蕭従一が受け取ったメッセージに象徴される神仙世界との繋がり、それを紐帯とする玄宗朝のイデオロギーに一度は身を染めながら、いまは離脱を余儀なくされた喪失感が、意識するとしないとにかかわらず反映されていると見るべきであろう、ということである。「古風」其一に見える、政治参画への意気ごみは、応徴入京時のものと見てよい。「聖代　元古に復し、衣を垂れて清真を貴ぶ。群才　休明に属し、運に乗りて共に鱗を躍らす。文質　相炳煥し、衆星　秋旻に羅なる」（集巻2）。自身もまた『道徳経』の道を体現する人物として隠逸挙により登用されたひとり、秋空に輝く星のひとつである。それがいまは逐臣の身となった。皇帝の霊応に沸く帝都を離れて二年余。その間、道を訪い念願の道籙も得た。作中における神仙との交信失敗から目覚めへという流れは、神との交流を背景とした永遠なる御代という、玄宗朝の描く仮想世界から覚醒する意識のあらわれである、とも読める。夢から覚めて志を述べる形式は「春日酔起言

志」詩にも見える（「処世若大夢、胡為労其生。所以終日酔、頽然臥前楹。覚来眄庭前、一鳥花間鳴。借問此何時、春風語流鶯。……」集巻21）。徴招入京、応試登用、翰林供奉、賜金放還。離京後の道籙授与。これら一切を精算し、いま新たな地へと旅立とう。あこがれの江南へと。

入海随煙霧　杜甫の歌行及び七言古詩には、制作の技術的側面と人脈の両方で李白の影響を考え得るものがある。「送孔巣父謝病帰遊江東兼呈李白」詩、及び「玄都壇歌寄元逸人」である。前者は李白が江東へ去った翌年、天宝六載春の作。孔巣父は李白が開元末頃に東魯で交流があった。郡の長官に拝謁したそのひとを見送り「送韓準裴政孔巣父還山」詩（集巻14）を贈っていた。伝記は『旧唐書』（巻163）及び『新唐書』（巻154）本伝に詳しく、李白を含めた「竹渓六逸」の話ほか、永王璘の起兵に参加せず名が挙がる、徳宗時に湖州観察使その他に栄進、朱泚の乱の際に献策し帝に激賞せらる、興元元年に宣慰使として李懐光のもとに赴き殺害さる、などが伝えられる。詩題の「謝病……」から、この間に職を得ていたことがわかる。杜甫「雑述」（集巻19）は、張叔卿なる人物とともに彼を魯の不遇の士としており、李杜それぞれに早くから面識があったことが知れる。杜甫は李白と別れて後、天宝四載冬と五載春であろう、「冬日有懐李白」詩（集巻9）と「春日憶李白」詩を書き、思いを綴った。後者には、李白の詩想は群を抜き敵うものがない。清新なるところは庾信、俊逸なるところは鮑照のよう。いつの日かまた文章談義をしたいもの（「白也詩無敵、飄然思不群。清新庾開府、俊逸鮑参軍。……何時一樽酒、重与細論文」集巻9）と。それからさらに一年。いま共通の友人を介して直接ことばを届けようという。「送孔巣父謝

病帰遊江東兼呈李白」詩（集巻1）は以下のとおり。

巣父掉頭不肯住　巣父　頭を掉(ふ)り　肯えて住(とど)まらず
東将入海随煙霧　東のかた将に海に入りて煙霧に随わんとす
詩巻長流天地間　詩巻　長に天地の間に流れ
釣竿欲払珊瑚樹　釣竿もて珊瑚の樹を払わんと欲す
深山大沢龍蛇遠　深山大沢　龍蛇遠し
春寒野陰風景暮　春寒く野陰くして　風景暮る
蓬莱織女廻雲車　蓬莱の織女　雲車を廻らし
指点虚无是征路　虚无を指点す　是れ征路なりと
自是君身有仙骨　自ら是れ　君が身に仙骨有るも
世人那得知其故　世人　那(なん)ぞ其の故を知るを得んや
惜君只欲苦死留　君を惜しみて只だ苦死して留めんと欲するも
富貴何如草頭露　富貴　何ぞ草頭の露に如かんや
蔡侯静者意有余　蔡侯は静者なりて　意に余り有り
清夜置酒臨前除　清夜　置酒して前除に臨めり
罷琴惆悵月照席　琴罷み　惆悵　月　席を照らす

幾歳寄我空中書　幾歳か我に寄せん　空中の書
南尋禹穴見李白　南のかた禹穴を尋ね　李白を見ば
道甫問信今何如　道え　甫が問信して　今何如んと

孔巣父はくびをふって留まろうとはせず、東に下って海へと入りかすみを追いかけようとする。
詩集を永遠にこの世に流布させたまま、釣り竿で珊瑚の樹をはらおうとしている。
深い山や大きな沼には龍や蛇がひそみ、春なおさむく野原は陰り景色は日暮れてゆく。
蓬莱の島に住む織姫は雲の車を走らせ、虚空を指さしてこれが行く路だと示す。
もともとあなたには仙人の資質があるが、世の人はどうしてその理由を知ることができよう。
あなたを惜しんでどうにか引き留めようとするが、富貴は草に結ぶ露ほどの価値もないと。
蔡侯は静者で思いは充分なものがあり、清らかな夜に酒宴を設け庭前の階に臨まれた。
琴の音がやみ愁え悲しめば月が筵に照り映える、わたしに空からの書をくれるのはいつのこと。
南方に禹穴を探し李白にあったなら、伝えてほしい、杜甫がよろしくと、いまどうしていると。

李頎や盧象のように七言古詩による人物描写を主体とした作。李白や王維の詠物歌行とは異なる。孔巣父は首を振ってこの世界に見切りをつけ、神仙を求めて大海原に出ようとする。特徴的な仕草から始まるのは、新機軸を打ち出そうとしたか。「海に入りて煙霧に随わん」と言うのは、李白「夢遊天姥吟留別」に瀛洲が「煙濤微茫

信に求め難し」に呼応するようだ。孔巣父は詩集を遺し、珊瑚の枝をひっかけに行くという。龍蛇ひそむ江東の地に春は寒く薄暗く、迎えの仙女は虚空を指し示す。君に仙骨あることを世間は知らず、引き留めても富貴など価値なしとする。李白が夢のなかで天姥に赴いたのに比して、ここでは「珊瑚」「龍蛇」「蓬萊織女」など異界に属するものが、目の前のひろがりに隣接するように配置される。李白とはまた異なる杜甫の想像力の働かせ方が見てとれる。おそらく、李白が江東をめざして東魯の諸公に留別した作に対し、長安にいた杜甫はそれから半年後、彼なりに応えようとした。「兼ねて李白に呈す」とはそうした含みを持とう。いま李白が去ったおなじ土地をめざす、共通の友人を送別する場にめぐり遇った。彼もかつて李白に詩を贈られた、隠逸者としての過去をもつひと。この詩の書きようからすれば、病を謝して辞するその役職は、やはり隠逸挙人等、制挙によって得たものであろうか。蔡侯が催した宴は琴もやみ月が照る、君が天から手紙をくれるのはいつ。もし禹穴で李白に遇ったら杜甫がよろしくと。宴のさま、李白への伝言を述べて、詩は括られる。

「玄都壇歌寄元逸人」（集巻1）は制作年代不明。黄鶴は天宝十一載、劉孟伉『杜甫年譜』も同年に懸けるが、確かな証拠が示されない。また「元逸人」が誰か、盧世㴶は李白友人の元丹丘かと言い、聞一多もそれを引くが、確証がない。「玄都壇」とは神仙の所居を祀った祭壇のようだが、これを主題に詠物歌行を試みた。本文は以下のとおり。

故人昔隠東蒙峯　　故人　昔隠る　東蒙の峯
已佩含景蒼精龍　　已に佩ぶ　含景蒼精の龍

故人今居子午谷　故人　今居る　子午谷
独在陰崖結茅屋　独り陰崖に在りて茅屋を結ぶ
屋前太古玄都壇　屋前　太古の玄都壇
青石漠漠常風寒　青石漠漠として常に風寒し
子規夜啼山竹裂　子規　夜啼きて　山竹裂け
王母昼下雲旗翻　王母　昼下りて　雲旗翻える
知君此計誠長往　知る　君が此の計　誠に長往なるを
芝草琅玕日応長　芝草　琅玕　日び応に長ずべし
鉄鏁高垂不可攀　鉄鏁　高く垂れて　攀ずべからず
致身福地何蕭爽　身を福地に致して　何ぞ蕭爽たる

友はかつて東蒙のみねに隠れ住んだが、もうひかりを秘めた青くかがやく龍を身につけていた。
友はいま子午谷に住んでおり、ひとり北むきのがけにかやぶきの家を立てている。
家の前には大昔の玄都を祀る祭壇があり、青い岩がほの暗くいつも冷たい風が吹いている。
子規鳥が夜に鳴くと山の竹が裂けたよう、西王母が白昼に舞い降りると雲の旗がはためく。
あなたのこの計画はほんとうに永遠への旅立ち、芝草や琅玕は日ごと大きくなっていくだろう。
鉄の鎖が高所より垂れてよじ登ることができず、福地に身を寄せてなんとすがすがしいことか。

東蒙の峰に棲み剣を帯びた往時、長安南山の子午谷に庵を結ぶいま。「東蒙」の地名は、杜甫が李白と東魯で范隠居を訪ねた「与李十二白同尋范十隠居」詩に「余亦東蒙客、憐君如弟兄」（集巻9）とあった。また朱鶴齢は「昔遊」詩「東蒙赴旧隠、尚憶同志楽」（集巻3）が元逸人を指すとする。聞一多はこれらをもとに、彼らの出会いを天宝四載としている。出会った頃の若く凛としたいでたちに対し、どれだけの時間を経たものか、そのひとの現在はひっそりと落ち着いたたずまい。人物描写から中盤に遷り、対象の詠物描写となる。玄都壇は太古のおもむき、青い岩はほの暗くひんやり。子規の声に山の竹が裂けたかと驚き、西王母が舞い降りて雲旗はためく幻影を見る。現実と継ぎ目なく繋がる、ほの暗い向こう側へと、ふと滑りこんでしまうような肌触りに、杜甫の個性を見ることができる。君はきっと永遠へと旅立つだろう、仙草もすくすくと育っている。垂れる鎖によじ登ることはできないが、福地のすがすがしさを感じている。相手の計画が成就することを祈念し、それに従えぬ自身の立場を述べて、歌は締められる。

〈キーワード〉李白、杜甫、高適